家庭雜誌

第參拾壹號

堪忍　ならぬ堪忍するが堪忍。

海濱の快樂　海綿の生涯を見るも面白し。

砂上の文字　砂の上の文字は消ゆることあり、記臆は何時か消ふ可き。

膝坊主の傳　彼は山鬼の靴を得たりき。

暑中休暇と學生　彼等に最も大切なるの時なり。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

善良齒磨保齒散

定價 袋入 貳錢 小箱 三錢 大函 五錢 壜入 拾錢

保齒散は專ら化學的に口中を清潔にするの効を有するを以て齒質を磨滅するとなく齒牙を保全するの特効を有す加之齒磨楊枝の消耗は他品を用ゆるに比して甚僅少なり

保齒散は齒牙に附着する不潔汚穢の物質を清掃し去るのみならず兼て口腔粘膜を清淨にするの効を有するを以て口熱を除き口中の惡臭を去り齒齦の痛痒齒間に於ける食物の腐敗に因する齲齒疼痛を緩解し其他口中に發する諸種の病を豫防するの効を有す

保齒散は他の或る齒磨粉の如く使用の後尚砂石を嚙むが如き感なきのみならず使用の即時より口中を清漱したる後に至る迄一種の美味を覺へ精神を爽快ならしむるの効を有す

保齒散は通常齒磨粉の如く毎朝入用丈けを手掌等に取分け柔き毛の楊枝を以て使用し小見又は病蓐に在る人の如き楊枝を使用する能はざる者には微温湯に溶解し含漱せしむる時は化學的に口中齒牙を清淨にするの殊効を有し而して若し唾液と共に嚥下することあるも敢て其害あるとなし○御試用の上御高評を希

發賣元 東京神田錦町一丁目八番地 **秋元商店**

東京產科婦人科病院

東京神田區駿河臺袋町十三番地（小松宮殿下邸前）

院長 醫學士 **增田知正**

●診察時間午前七時ゟ十二時

副院長 **水原漸**

●診察時間午後一時より四時

●女生徒募集●

本館ハ高等女學科、撰科、特別科、高等專門科、尋常小學科ノ五科ヲ設ク●高等女學科ニ於テハ修身、國語漢文、習字、圖畫、家事等必須ノ學科ハ一般ニ之ヲ履修セシメ英語ト手藝トハ何レカ其ノ一ヲ撰バシム●撰科、特別科ニ於テハ生徒ノ希望ニヨリ本館所定ノ學科中一科若クハ數科ヲ敎授ス●高等專門科ニ於テハ高等女學科卒業ノ後有志ノ者ヲシテ國文學、漢文學、英文學及ビ繪畫ノ中一二科ヲ專攻セシム●尋常小學科ハ多級ニ編成シ四學級ヲ置キ他日高等女學科ニ入ルベキ女兒ヲ敎養ス●以上各科何レモ欠員アリ當分ノ內何時ニテモ入學ヲ許ス規則書入用ノ者ハ郵劵二錢ヲ添ヘテ申込ムベシ●寄宿ヲ望ム者ハ本館敎師相川勝子ノ居宅（館內ニアリ）ニ同居シ同人ノ監督ノ下ニ家族同樣ノ起居ヲナスコトヲ得

廿七年六月

麴町區虎ノ門內 **東京女學館**

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

◎◎牛乳ノ如ク飲ミ易ク且好味ナリ

此スコット乳菓中ニアル肝油ハ如何ナル胃弱ノモノモ少シノ滯リナク容易ニ服用シ得ル樣ニ調化シアルモノナリ

◎筋肉ノ製造者トシテ有名ナルスコット乳菓ハ肺病、瘰癧、精神疲勞、小兒ノ衰弱症及慢性ノ咳嗽ヲ治スルニ最好最良ノ調劑トシテ夙ニ歐米諸大醫ノ賞賛措カザル處ナリ

◎龍動スコット及バウン謹製

日本一手特約販賣所 **米國貿易商會**

橫濱廿八番
神戶十七番

◎賣捌所ハ全國至ル處ニアリ



純粹ノ肝油及次亞燐酸ノ配劑ナル

スコット乳菓

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家庭叢書

拾冊完結
毎紙數百頁餘○毎冊定價拾錢○郵便稅貳錢宛

新日本國民の地盤たる可き新家庭の建設、今日より急なるはなく、新家庭の摸範及嚮導の欠亡、今日より著しきはなし。是を以て新家庭建設の必要を感じ、家庭改革に心ある者も、茫として從ふ所を知らざるの看あるは、固に遺憾と云ふ可し。

我社此に見るあり、聊か世の急需に充てむが爲、此たび新に「家庭叢書」を發行し、以て新家庭建設に於ける一の燈明たらんことを期す。

「家庭叢書」は婦人小兒も容易に解し得可き平易親切の文字を以て、何人も心得となる可き家庭問題を說き明し、家庭の組織、家庭の改革、家庭の教育、家庭の經濟と生活、家庭の衛生、家庭の娛樂、國に對し人に對する家庭の關係、家庭の弊害及矯正、家庭の實用學問渾て家庭に關してあらふる心得となり實地の訓戒となり嚮導となる可き件々を明白親切に說明し、以て世の家庭を司どり若くは司どらんとする諸君が摸範的新家庭を築き家庭の改革をせらるゝにつきて、親切なる相談相手となり、嚮導となり、顧問役となり、助言者となるは、「家庭叢書」の期する所也。

「家庭叢書」は實地の適用を旨とするが故に、文章は明白平易、色々の議論、種々の學問、色々の事實、すべて讀むで知り知つて行ひ得可く適切着實ならんことを期す。

家庭叢書第一卷

家庭の和樂

愈々家庭叢書第一卷『家庭の和樂』出でたり、何の爲に出でたる耶、其題號の示せる如く、編者今日我國家庭の實情を患ひ、別に家庭の別天地を開き、新しき家庭の和樂を作さんとするにあり、家庭の和樂を如何にして得べきや、先づ家庭の憲法は一家の生命なるを說き、一面には權現樣以來の家風と稱して嫁養子を追出す家風を排擊し、一面には又世に經驗乏しき學校出身の妻君を非難し、然らば如何にして家風を興すべきやとて、細に其方針を指し、武士は喰はねど高楊子して乞兒に奉ると、働きて錢を貯ふると、借金の爲に首の廻らぬと、妻君が味噌漉を抱えて豆腐を買ふと其孰れが是なるか非なるかを論じ借金をせぬ工面は如何、貯金をする節易の方法は如何と敎へ家庭の治安を謀るには舅や姑や小姑やを如何にすべきや、下女と結髮と隣人は家庭の和樂に如何なる影響を及ぼすか、家庭遊樂の撰擇の如何は、收て皆此一小冊子の中にあり、文章通俗にして多くの學說を引用せざれど、要は唯だ實例を擧げて爲し得らるべき家庭の和樂を計るにあり、

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

商標

グランドトレス膏

僂麻質・流行感冒
腰痛・痰咳
風邪ニ偉効アリ

定價壹枚金参拾五錢

日本一手販賣元　横濱廿八番　米國貿易商會

特約

關東大販賣所
東京日本橋區本町四丁目　藥種問屋　島田久兵衛
同　同區本町三丁目　藥種問屋　島田忠兵衛
同　同區室町三丁目　藥種問屋　資生堂

關西大販賣所
大阪東區道修町二丁目　藥種問屋　小西儀助

民友社出版書籍目錄

每月出版 十二文豪

紙數毎冊二百頁
內外十二冊完結

平田久著
第一卷 十二文豪 カーライル
定價拾八錢 郵稅四錢

竹越與三郎著
第二卷 十二文豪 マコウレー
定價拾八錢 郵稅四錢

山路彌吉著
第三卷 十二文豪 荻生徂徠
定價拾八錢 郵稅四錢

宮崎八百吉著
第四卷 十二文豪 ヲルヅヲルス
定價拾八錢 郵稅四錢

高木伊作著
第五卷 十二文豪 ゲーテ
定價拾八錢 郵稅四錢

十二文豪第六巻　エマルソン　定價拾八錢　郵税四錢

以後出版の書目人名左の如し
「賴山陽」……德富猪一郎
「トルストイ」……德富健次郎
「瀧澤馬琴」……塚越芳太郎
「近松巣林子」……塚越芳太郎
「新井白石」……山路彌吉
「ユーゴー」……入見一太郎

毎月出版　平民叢書　毎月一回發兌　十冊完結　紙數百五十頁

平民叢書第一巻　十九世紀之大勢　定價拾貳錢　郵税貳錢

平民叢書第二巻　世界經濟上之變動　定價拾貳錢　郵税貳錢

平民叢書第三巻　國家と政府　定價拾貳錢　郵税貳錢

平民叢書第四巻　教育と遺傳　定價拾貳錢　郵税貳錢

平民叢書第五巻　文明之弊及其救治　定價拾貳錢　郵税貳錢

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

平民叢書第六卷
現時之社會主義
定價拾貳錢
郵稅貳錢

平民叢書第七卷
經濟と道德
定價拾貳錢
郵稅貳錢

平民叢書第八卷
歷史攻究法
定價拾貳錢
郵稅貳錢

平民叢會第九卷
哲學變遷史
定價拾貳錢
郵稅貳錢

平民叢書號外
銀貨之過去現在未來
定價拾錢
郵稅貳錢

平民叢書號外
責任內閣
定價拾錢
郵稅貳錢

國民叢書
人物管見
定價拾五錢
郵稅二錢

國民叢書
青年と教育
定價拾五錢
郵稅四錢

國民叢書
靜思餘錄
定價拾五錢
郵稅四錢

國民叢書
文學斷片
定價拾五錢
郵稅四錢

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

● 第一國民小說　定價拾五錢　郵稅四錢

● 第二國民小說　定價拾五錢　郵稅六錢

● 第三國民小說　定價拾五錢　郵稅四錢

● 第四國民小說　定價拾五錢　郵稅四錢

● 湖處子宮崎八百吉著　歸省　定價拾五錢　郵稅四錢

● 乾坤一布衣著　最暗黑之東京　定價拾三錢　郵稅四錢

● ヴヰクトル、ユーゴー著森田思軒譯　懷舊　定價貳拾錢　郵稅四錢

● 德富猪一郎著　吉田松陰（肖像入）　定價五拾錢　郵稅八錢

● 德富健次郎纂譯　グラッドストン（肖像入）　定價貳拾錢　郵稅四錢

● 德富健次郎纂譯　武雷士（ブライト）（肖像入）　定價拾五錢　郵稅四錢

● 德富健次郎纂譯　格武電（コブデン）（肖像入）　定價貳拾錢　郵稅四錢

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

竹越與三郎纂譯
格朗穵（肖像入）
定價貳拾錢
郵税四錢

平田久著
伊太利建國三傑（肖像入）
定價貳拾錢
郵税四錢

櫻痴居士福地源一郎著
幕府衰亡論
定價三十五錢
郵税六錢

櫻痴居士福地源一郎著
懷往事談 附 新聞紙實歷
定價貳拾錢
郵税四錢

竹越與三郎著
新日本史　上
定價四拾錢
郵税六錢

竹越與三郎著
新日本史　中
定價三拾錢
郵税六錢

德富健次郎著
近世歐米 歷史之片影
定價貳拾錢
郵税四錢

人見一太郎著
自主的外交
定價貳拾錢
郵税貳錢

人見一太郎著
國民的大問題
定價貳拾錢
郵税貳錢

第二之維新
定價貳拾錢
郵税貳錢

ゼームスブライス著 人見一太郎譯
平民政治
全二冊定價弐圓 特別弐圓五拾錢

高橋五郎著
排偽哲學論
定價拾弐錢 郵税弐錢

德富猪一郎著
新日本之青年
定價弐拾錢 郵税四錢

德富猪一郎著
國防論
定價拾五錢 郵税弐錢

梶原保人著
政黨論
定價弐拾五錢 郵税四錢

文學博士元良勇次郎著
佛國不換紙幣發行始末并信用論
定價拾錢 郵税弐錢

佛國ブーミー原著 深井英五譯
英米佛比較憲法論
定價弐拾錢 郵税四錢

德富猪一郎編纂、久保田米僊揮毫挿畫
誕生日
定價拾五錢 郵税弐錢

人心の明鏡處世の秘寳
一諾千金
定價五錢 郵税弐錢

○發行所 東京京橋區日吉町 民友社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

德富猪一郎著　久保田米僊插畫

五版

誕生日

定價拾五錢
郵稅四錢

○此書は父母兄弟姉妹朋友の誕節を記臆せんが爲め其の誕生日を記載する冊子也
○巻中の一面には餘白を剩して其の人々をして自から其の姓名を誕節に相當する月日の欄内に記錄せしむるを得可し是れ獨り其誕生日を記錄するのみならず併せて父母兄弟姉妹朋友の手蹟帳たるを得可し
○他の一面には東西の聖經賢傳詩歌金言を揭げ以細晨夕の諷誦に供す
○又た米僊子の清淡奇逸なる一年の期節に相當する繪畫七十餘を插めり
○斯書を編纂したる主旨は獨り自個の誕生日を紀念し祝し且つ勵むに止らず併せて其の父母兄弟姉妹朋友の誕節を祝して慇懃傾倒の情を表するにあり是豈に人生の和樂を增し社會の情緒を温むる所以にあらずや
○冊子小なりと雖淡麗清楚且つ各種の便宜備る金蘭簿たるを得可く備忘錄たるを得可く金誠集たるを得可く又た文苑繪畫の奇觀たるを得可し何人も一本を持す可き要書と信ず

發兌元　東京々橋區日吉町　民友社

宮崎湖處子著

歸省

定價拾五錢
郵稅四錢

歸省が如何に趣味に富み如何に世人に愛讀せられたるかは今更に說明せざるべし十二版を重ねたるは能く之を證するなかれ江湖の諸君一讀の勞を愛むなかれ

乾坤一布衣著

最暗黑の東京

定價拾三錢
郵稅四錢

最下層の生活の情態を描出して華麗なる東京の半面が如何に悽愴悲慘なる有樣なるかを社會に紹介するは最暗黑の東京なり今や四版を重ね大方君子一本を坐右に供せよ

自主的外交

定價拾錢
郵稅二錢

議會は何によりて解散せられたる乎。自主的外交責任内閣を主眼とせる上奏によりて解散せらる。然らば則ち總撰擧の問題は自主的外交責任内閣にあるや論なし。

發兌元　東京京橋區日吉町　民友社

農學士大島正健先生譯

ありふれ物語

表題○夢ならぬ夢○心の浮詣○新天路歷程○腹中の蛇

右は目下我邦清潔なる家庭書類欠乏の折に際し聊か其不足を補ふ目的を以て米國の文豪ホーソルン氏の巧妙なる筆に成れる短篇文四種を撰み邦語に譯して出版せるものなり

價十二錢 郵稅二錢

印度物語

價七錢 郵稅二錢

發兌元 東京京橋出雲町 警醒社書店

エー、エル、ハウ女史著

保育學初步

實價四十錢 郵稅六錢

本書は十數年來專ら斯道に從事せらるゝハウ女史が過る數年間神戶頌榮幼稚園保姆傳習生のために講述せられたるものにして親切恩物手藝遊戲等の原理を說明し添ゆるにフレーベル氏其の他斯道に功勞ありし人々の小傳を以てしたれば幼稚園事業の原理を明かにすべきは言ふ迄もなく廣く幼兒教育全躰に關する原則の要領を窺ふに足るべし苟も保姆の重任に在者は勿論小學校及家庭の教育に從事する者其他初等教育に有志の士之を精讀せば其得る所尠少ならざるべし

發賣所 大坂西區土佐堀三丁目 福音社

賣捌所 東京新橋出雲町一番地 警醒社書店

舶來流行夏物澤山着荷

歐洲流行女夏帽子○同小供帽子○夏用ハンカチーフ同シヤツ○同靴足袋同皮絹手袋○東髮ピン婦人洋服附屬品等

新橋南金六町一番地 婦人洋服附屬品商 關口商廛

速記法

自宅獨習生募集 月謝二十錢二ケ月卒業規則書入用者は郵券二錢を投ずべし

東京下谷區徒町二丁目卅一番地 速記學專修所

社告

家庭雜誌は凡て前金に非されば發送せす、見本は郵券五錢な(?)にて送す、郵便爲替の拂渡局は芝口支局、本誌代價の郵券代用は爲替局の無き地に限り可成五厘切手にて一割增

家庭雜誌

○每月二回十日廿五日發兌

定價		郵稅 地方共
一冊	金五錢	金五厘
半年（十二冊）前	金五十錢	金五十六錢
一年（廿四冊）同	金一圓	金一圓十二錢

○廣告料一行（廿四字詰一回ニ付）金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

本社電話番號七十番

發行兼印刷人 垣田純朗
編輯人 塚越芳太郎

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

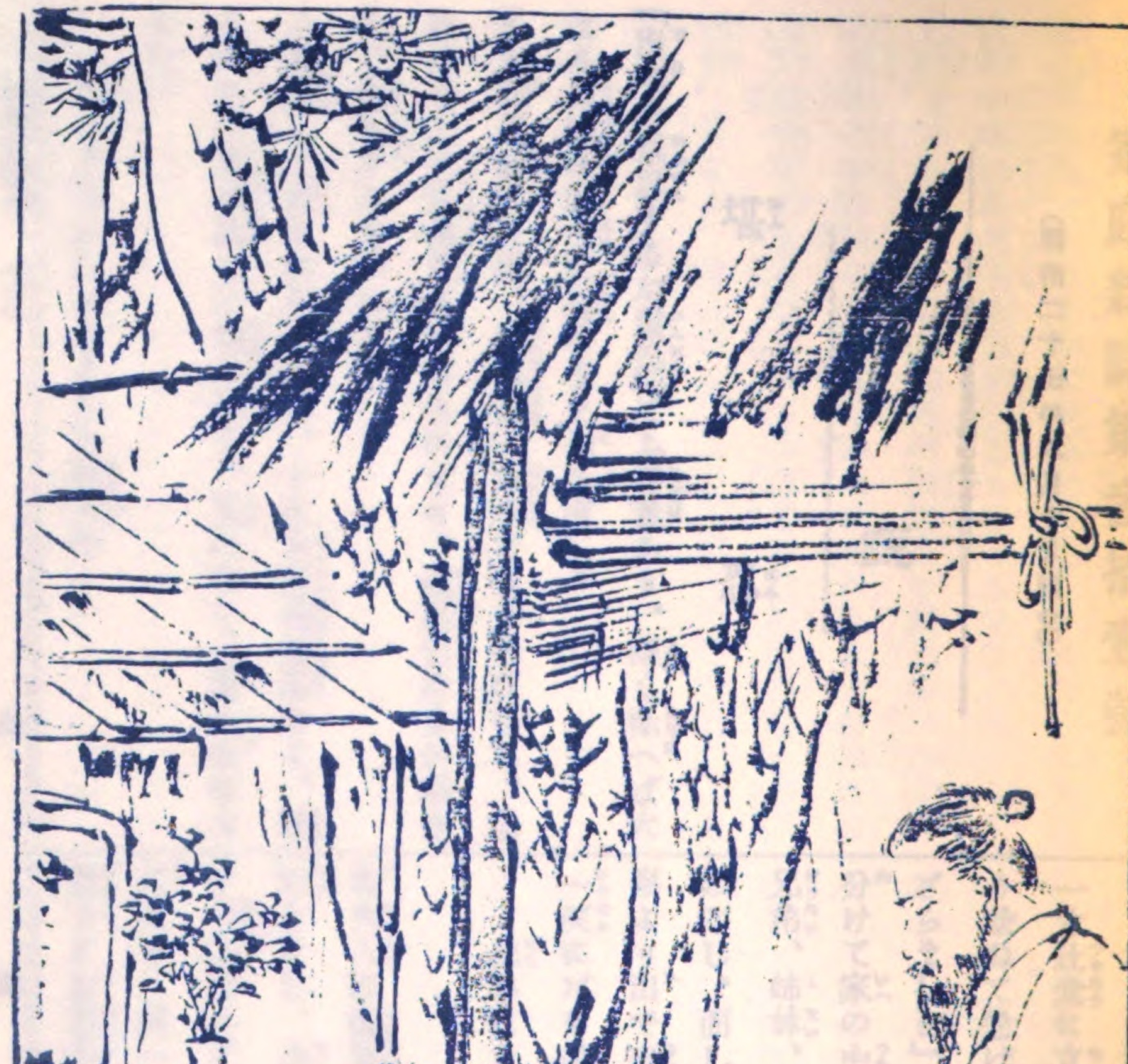
明治二十七年六月十日發行

家庭雜誌第參拾壹號

目録

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家庭雜誌第參拾壹號
（明治二十七年六月十日發兌）

社説

堪忍

『出來ぬ堪忍するが堪忍』てふ言葉あり、深く味へば大なる眞理此の中に存するを知る可し。

凡そ身を持するに、堪忍程、大切なるものはなし。堪忍せずして後悔するとはあれども、堪忍したるが爲めに、後悔するとやある。

人に對して怒りたらん時に、十五分間程堪忍せよ、然らばその怒は概して烟の如く、雲の如く、消へ失せ去らむ。

急がずばぬれざらましを旅人の
　　あとより霽るゝ野路の村雨

一寸辻堂に立ち寄りさへすれば、濡れぬ旅衣も。たまり兼ねて急げばこそ驟雨にも逢ふなれ。『急がずばぬれざらましを』の一句、能々記臆す可きとぞかし。

分けて家の中にて、最も見苦るしきは、舅、姑、夫婦、兄弟、姉妹、口きたなく顔赤らめ言ひ爭ふに過ぎるものなし、而して其源を質せば、譯けも、たわひなき事より出で來りたるものにして、少しく思慮すれば、一笑にだも値ひせざると往々にして然る也。

　底ひなき淵やは騒ぐ山川の
　　淺き瀬にこそあだ波は立て

兎角人は淺墓にては行かぬなり。何事も篤と考がへ分別をなし、決してはしたなき事を言ひ、はしたなき事を行ふ可らず。斯くなさんには、先づ堪忍が第一の要目なり、第一の入門なり、堪忍の功夫さへ出來れば、追々と思慮分別も出來る也。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

堪忍とて心に黒と思ふとを、口に白と云ふことにあらず。心に惡と思ふことを、口に善しと云ふにあらず。斯る事は詐りにして、詐りは人の最も好すまじき惡德なれば。夢にも斯る心得違ひをなす勿れ。堪忍とは表裏反覆の謂ひにあらず、人前を作り飾るにもあらず。唯だ心平らかに氣和らかに、一時の不調子なる、度外なる、法外なる、喜怒哀樂を抑へ、能くその平衡を得せしむるのみ。

堪忍の入用は、怒りを抑ふるのみにあらず、總て哀しむも、悅ふも、樂しむも、性情の和平を失ふとは、人にして大ひなる欠點、大ひなる過ちなれば。能くその過ちに陷らぬ樣用心するは、何人も忘る可らざる所ろにして、之を忘れざらんとすれば、先づ堪忍の二字より修養せねばならぬ也。

昔し葛城王、奥州に下たるに、國司彼を冷遇したれば彼色悅ばず、事の幹たらく、穩かならずありければ、采女なる女子あり、

淺香山影さへ見ゆる山の井の
淺くも人を思ふものかは

と詠し、その意を慰めたれば、葛城王、翌然として醒覺する所ろあり。能くその怒りを忍び、爲めに驩を盡して止みたりと言ひ傳ふ。

婦人の夫婿を助くる所以の、大なる仕事は、別けて此邊の意味合ひを知る可し。即ち己れ獨り堪忍するのみならず、己れが堪忍したる所ろを以て、その夫婿の堪忍の足らぬ所を補ふの役目あるなり。

科學

海濱の快樂　其二

海濱を逍遙する時、我等の眼中に入りて、注意力を引き起すものは海綿なり。彼等に付きては、古來種々な

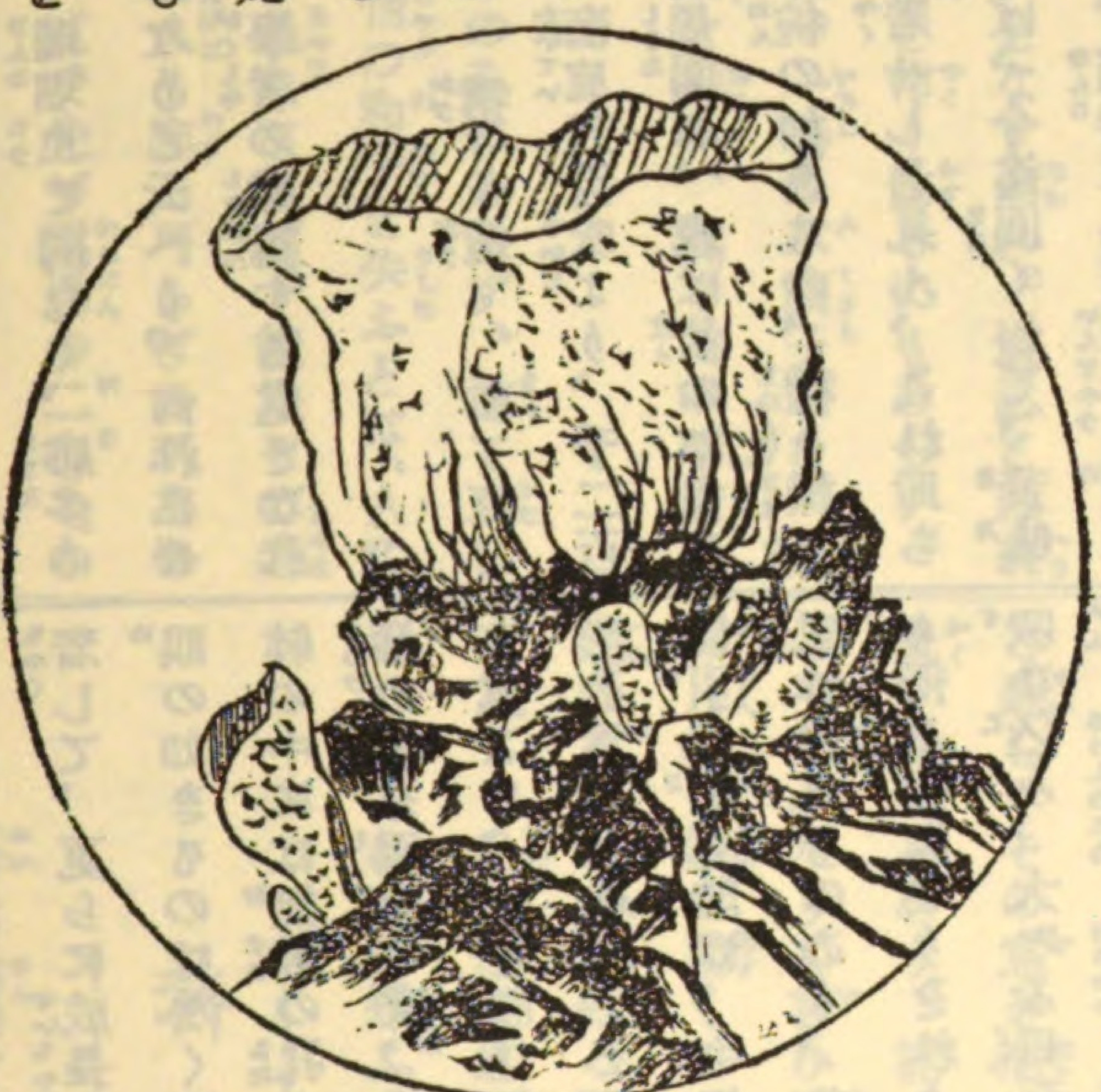
Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る學說ありて、或は彼等を植物なりと云ひ、或は動物として一定せざりしが、遂ひに海綿は手もなく足もなき、所謂全身胃袋なる動物なりと云ふ說に、ほゞ決定したり。されども或る人は、珊瑚虫と同じく、夥多の種類の動物の集まりたるものなりと云へり。何れにせよ、動物と云ふとは、多くの學者の識認する處となれり。

海綿の構造

我等若し、潛水器を着して、海底五百呎より、千二百五十呎の所に下る時は、岩の周圍に、或は盆の如きもの、或は鐘の如きもの、或は椀の如きもの、種々樣々なる丸き形を爲せるもの、附着せしを見ん、これ即ち海綿なり。四五月の頃に至れば、今迄圓くして、黃味がゝりたる白色なりし海綿は、漸時にして印形に芽の生じたる、恰も金米糖の如き形と變じ、各の角の先きに、ピタ〳〵と震動する、眼瞼の如きもの生じ、波のために、ゆら〳〵と動く中、躰は中途よりばら〳〵に切れて、角の先は、各々一個の動物となりて、數日の間波間を浮沈遊泳す。かくて己が望める一個の岩に附着して、更らに成長發育し、附着してよりは、先きの眼の如きものはなくなりて、漸々母躰と同じ形となる。躰の中には無數の孔あり、若し海中に下りて、その生活の樣を視察せば、彼等が、その孔即ち、口と稱すべき處より、水を吸ひ込み或は吹き出して、常に流水の形を爲すを見ん。その生きたる海綿の一を取り、半分に引き裂く時は、中には小さき孔と、大なる孔と入り亂れたるものあり、此の孔は中心より表面迄で拔け通り得る樣になりをれり。その小さき口を以ては、水を吸ひ込み、大なる口を明けるは、水を吹き出せり。海綿を同種類の動物の群集せるものなりと云ふ說を有する學者の言に隨へば數も知られぬ孔より、出つ入りつゝある水の運行は、常に一定にして不規則なる少き孔

より、入り來る處の水は、いつも特別なる孔より出で去るを見るを得へしと云ふ。且つ海綿の孔は、二通の働を爲せり、一は之によりて呼吸し、一は之によりて物を消化す、絶へず呼吸せる水の呼吸は、海綿のために最も大切なる關係を有せり。即ち小孔を通して水の內部に入ると同時に、躰の內壁は水中の酸素を吸入するの力を生ずるが一方には又た躰中の炭酸瓦斯を吐き出だすの働を爲す。かくして己れの入用のものを吸ひ、不用のものを吐き出すなり。或る種類のものは、彈力性を有すと雖も、暫時にして有せざるに至るとあり。


海綿の岩に附着する圖

種　類

「大英國の海綿」の著者、ベワールパペンク氏の說に由れば、海綿は實に二百種の多きに及べりと云ふ、彼等の或るものは少さくして、成長せざるあり、或るものは非常に成長するもあり

海綿の出所

今日にありては、通常の海綿は、シリヤ或はグリシヤの濱海にて取るを多しとし、その賣買も、同地方は最も盛なりと雖も、地中海等にても隨分捕獲盛んなり、シリヤ等にては六月頃より、十月頃迄は盛んに之を捕るを以て、海邊漁者のなりわいとす。その取り方に二方あり。一は

海岸近かくにあるものにして性質も脆ろく下等なるものなるが、之れは容易に取り得るが故に、價も隨つて安すし。他は二三十尋の海底にあるものにして、舟にて海濱一二里の所に乘り出で、數名のもの海底に下りて、三ツ叉を以て海綿を岩より離ち取るが故に價も廉ならず。

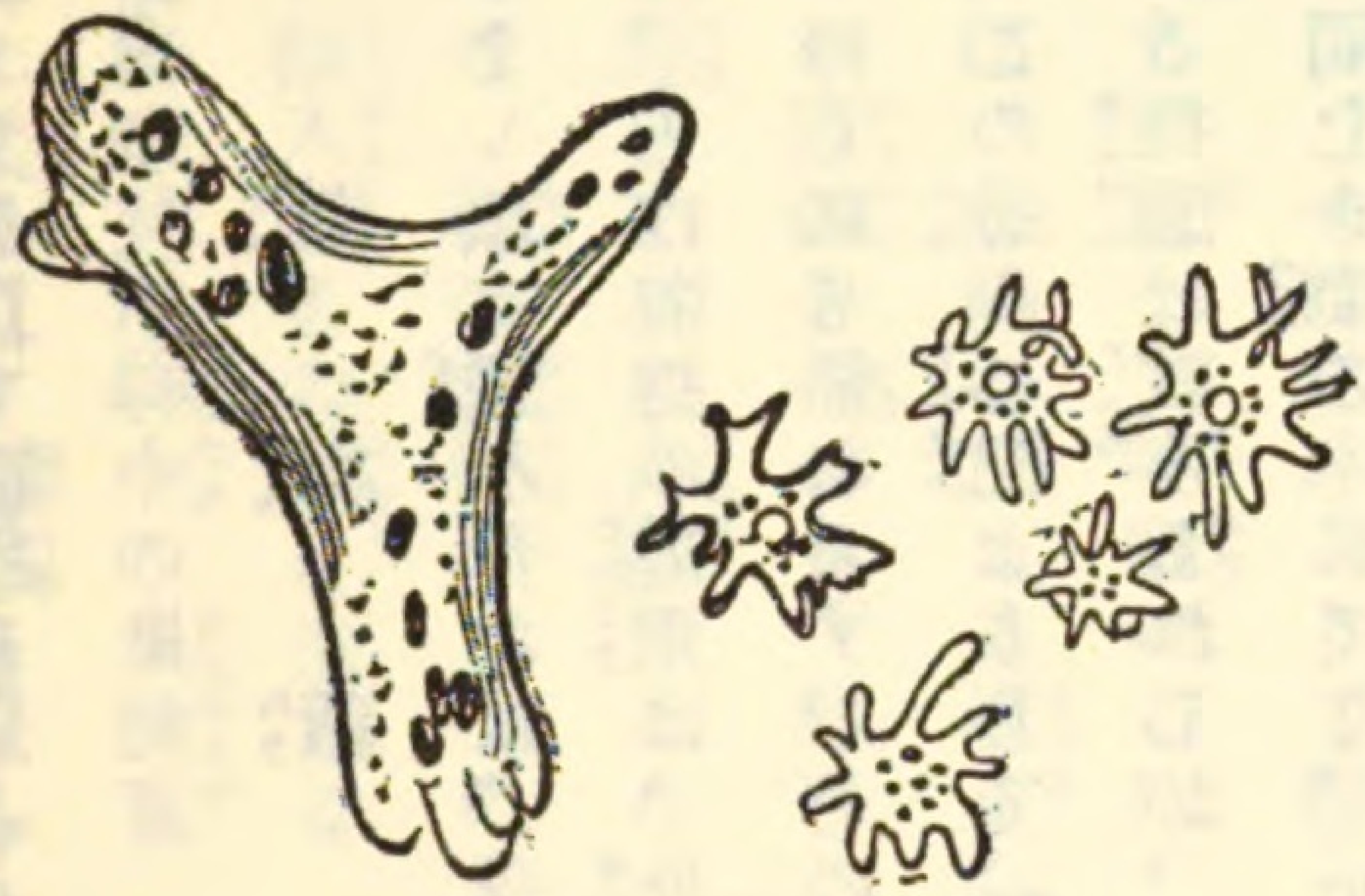
海綿獵

今日のまゝにて進み行かば、遂に海綿は世界より後をたゝん、そは海綿の需用は、世界の開化と共に伴なひて進み行くにも係わらず、その供給は限りあるが故なり、この邊の心配よりして、種々の試驗は試みられ、精密なる探驗は試みられしが、遂に一大發明は爲されたり。同じき海の中にても、いよ〳〵寒き處に行けば、いよ〳〵美事なる、良質なる、海綿を得るヿに心付きしより、或る海に生ぜる海綿を取り、それよりも温度の低き、他の海に轉殖せしむるヿを始たり。此の目的のために、最も成功あるは、海中船なり。海中船と云ふ船は、容易に海底に下るを得るのみならず、その船に乘ずる舟子は、何れも海底に長き時間の間、働きを爲して、少しも呼吸の窒息するヿなく、平氣に勞働し得るが故なり。その乘りたる人は性質の良さそうなる海綿を、岩の一部に附きたるまゝ、岩もろともに欠き取りて、その船に積み、船の一ぱへに成りたる時、船上にて番を爲しつゝある船へ、綱を引きて、合圖を爲す時は、容易に海上に浮み出づるを得べし、かくして積み上げたる海綿の岩を、他の海に運送して、移し植うるに、四五月の頃より、移されたる海綿の小供は知らざる他海にて、更らに成長繁殖して、三年の後に至れば、相當の收獲を得るに至ると云ふ。その海中船には、二本の管ありて、一本を以ては常に新鮮なる空氣を送り、一本よりは常に船中の腐敗したる空氣を取り去る樣に仕掛けたるが故に、かく長き時間海底

に居るを得るなり。

變形

海綿の形の變ずるとは、著しきものなり、肉眼にて見る中に或は左に折れ、或は右に曲り、或は金米糖の如く、或は蝸牛の如き形となる、上圖は小さき海綿の變形せし處を、顯微鏡にて見し處なり、博士コリカー氏の說に由れば、海綿は堅きものを食して、之を消化するを得れども、不消化なるものは、たとへ柔らかくとも、之を吸ひ込まずと云へり。市場に多く海綿ある中にても、シリヤにて取れる海綿は、輕ろくして、麻の如き色をなし、茶碗の如き形をなし、その表面は入り亂れ、少さき多くの孔あるを以て知るを得べし、此の種の海綿は、時にアルカリの爲に白色になりたるものもあるが、アルカリは色を變ぜしむるのみならず、その入り亂れたる目をも變せしむ。此のシリヤにて生ぜるものは、多く裝飾品に用ゆるが故に、價最も高かし、之れに次ぐものはグリシヤ產なり。此の處にて產せしものは、シリヤのものと、粗ぼ同一なれども、少しく重みあると、孔の數の少なきと、目の美ならざるにより、少しく廉價なり。之に次ぎて價は安すけれども、日用に必要なるは、グリーキ產にして、その形は種々の變化あり、色は黃色にして、質は堅く、小さき穴の明きたるものはそれなり我等が、海邊に遊步して、種々なる海綿の切れを拾ふ時に、以上の事を參照して、種々の事に引き合せて見る時は、その面白きと幾許ぞ。



文藝

砂上の文字（上）

砂の上の文字！文字は消へて已に久しくなりぬ、容赦なき波は幾度か之れを洗ひまた洗ひて今は其の痕も夢にさへ認む可からずなりぬ、然れど彼記臆！記臆は何時か消ふ可き、何時かは消へ果つ可き。

* * * * * * * *

今を距る五つとせの昔、妾十九歳の夏の初なりき、不圖したる病長びきて容易に全治す可くも見へざりければ、醫師の勸に任せて相州の海邊某の村に行きぬ。清き海邊の空氣を吸ひ、海水に浴して、藥劑の足らざる所を補はむとてなり。

妾が都を出でし時は、都人は昨日今日單衣着そめ、堀切の花菖蒲恰も開園したる程の事なりしが、田舎に來て見れば夏景色早や整ひぬ。麥は大方苅り上げられ、苗代水に映る雲の影淡く、青葉の山につゞく碧りの空高く晴れて、山邊には蟬の音已に聞へ、夜は屋を繞りて螢飛び蛙鳴けり。妾が宿りしは、海邊より少し離れて山邊に寄りし此村にて名ある豪農某の家なりき。

妾は例年此家に避暑する知己の紹介によりて此處に來りぬ。家は藁葺ながら、結搆宏大にして、隅より隅まで掃除よく行き屆けり。廣き庭には麥から秩序正しく積まれ、廣き臺所には自在にかけし藥罐美くし光り、農具は奇麗に一所に排列せられ、廐には麥秋すぎて馬も暫し晝寢の夢長閑なり。妾が借り得たるは奥の六疊の一ト間にて、前には蘇鐵藤桃梅芭蕉抔面白く植へ、柘榴の花は青葉が間に燃へ、栗の花は將軍の肩を飾るエパウレットの如く白く樹頭に咲きこぼれたり。事もなき長き日の午後、學校の友達や故鄕の父母を夢みし晝寢の夢より醒めて、何心なく枕頭の障子サッと開く

時、栗の花の香草の香青葉の香を忍びやかに偸み將ち來る青嵐の、如何に涼しく妾が鬢絲の亂れたるを吹きさいなみしよ。

妾が病は打棄て置く病ならざるも、唯長き注意と療養を要するの外、格別苦痛も困難もなき病なりければ、妾は携へ來りし書を讀み雜誌を讀み書を寫し、淋しき折々は家の主人主婦小供等と隔てなき物語りに時を消し、または朝夕の散歩に身を養ひ心を慰めたり。夏は稍淺く避暑の客も未だ到らざれば、妾は殆んど海邊の女王山邊の女王抑も亦野邊の女王なりき。あらゆる好風好景は、妾一人の所有の如くなりき。朝疾く出で、、夜露に洗ひ上げし緑り滴るばかりの山の側に靜かに倚れる茅舍より炊煙の夢の如く淡青の空に立昇るを見、緑針の如く生ひ揃へる苗代田の隅に慈姑藺などに打まちりて美しく咲きたる花菖蒲の花を數へ、農家の籬越しに罌粟の花の紅なるを覗き、山邊の小路を通りては雪の如く咲き殘れる茨に袂を捉へられ、潮滿ち青蘆戰ぐ小川に沿ひ行きては葦の間より突然に出で來る辨慶蟹に行手の路を遮られ、晝顏の花の咲き滿ちたる砂原路を通り、松原出ぬけて渚に立ちつゝ、瑠璃の如く滑らかなる海原の彼方に薄ッすり引いたる夏霞の間より雪の富士の夢の如く白きを見る時は、妾は詩才のなきを憾みぬ。美しき日は美しく暮れて、人は家に入り、馬は廐に入り、暮色は海に白帆の影を隱し、陸には燈の光り前村後村點々數ふ可きの時、獨りさまよひ出で、滿地の蛙聲に浸りつゝ、葦の葉を立ちて葦の葉に宿る螢を飛ぶ星かと疑ひ、澄める江の水に落ちたる星の數々を水中の螢かと怪しみ、思ふともなく思ひ聞くともなく耳傾けて往來する折ふしは、吾にもあらで深く高き感情泉の如く心に湧くこともありき。

一日一日暮らす日は永けれど、過ぎての後の週は短かくて、妾か此村に來りしより何時しか一ト月近くなり、

梅子は黄熟して多くは地にあり、桃實は蓁々たる青葉の間に頬を赤らめ初め、妾が部屋より望まるゝ向ふの山の夏草の間には山百合の花點々星の如く咲き滿ち、清風盡日絶へぬ家にも加はれる暑さは身に覺へられ、一ト月の前夕の團欒の席にはじめて夏の消息を齎らし來れる蚊子は今や宵々大軍を催ふし鼓噪して蚊遣なき家を襲ふ頃となり、一ト滊車毎に東京より避暑客は來り、妾が宿れる家も知己の某々を始めとし人數多になりぬ。

膝坊主の傳

(下)　　湖處子

樵夫の子供らは、火影見えたる家につきて、戸を叩きしに、裡より優しげなる女房の出て來りて、戸をひらき、戸に群がれる子等を見て、何處より來るものぞと問ひたり。膝坊主はこれに答へて、山にて道に迷ひしものなることを告げ一夜の宿を許し玉へと乞ひぬ。女房は子等のいづれも愛らしき顔を見て、涙をうかめ「いと氣の毒の事ながら、こゝは御身たちの來べき處ならず、こゝは人間を捕つて食ふ、山鬼の家なるぞや」と云ふに、兄弟はいよ／＼愕き、さては我等は、話にきゝたる山鬼の家に、喰はれに來つるかと、又もや死たる心地なりしが、膝坊主は女房に向ひて、所詮山に返るとも狼に嚙殺さるゝは必定なれば、寧ろ山鬼に喰はれて死ぬべし。萬一山鬼我等を見ば、憐むで生命を助くることもあらんも知れずと答へければ、女房もいなみかね、幸ひ山鬼も不在なれば、兎に角に、明朝まで山鬼に知られぬ樣、渠等を臥床に隱して見ん、さらばとて渠等を誘ひ、山男の夕飯にとて、全牛を炙れる火爐の傍に居させて、温まらせたり。

兄弟たちが、火の傍に坐り、未だ碌々温まりあへぬ間

に、渠等が今來れる戸口に、地も震ふべき足音して、家も覆らんばかり戸を敲けば、スハヤ山鬼の歸り來玉へり、皆々こゝにと女房は、寢床の下に子等を推しこみ、聲をな立てぞと、おのれは起ちて夫を迎へぬ。夫なる山鬼は大なる足音立てゝ火の傍に來り、夕飯は出來たりや、酒は窖より出したりやを尋ね、食事の用意調ひたるを聞き、食臺に就きたるが、一分か二分も立たず、大なる鼻を動かして、人臭し人臭しとウなり、子供の肉の臭のすると云ひ出したり。「そは夕方料理し羊の臭なるべし」と、女房のすかすをうち消し「否、否、羊の臭にあらず、確かに人の臭なり」と、アチコチと見廻はしたるが、子供の見えねば、自身に立ちて臥床を推し退け、うつくまれる兄弟を見、六つまで其數を數へ、モーなき乎と、豆にても扱ふ如く、指先にて頭をころがして見、隱れてありし膝坊主の頭をつかみ出して、此處にも一つと、シレ〱うち笑み、機嫌顔に女房を見て「ハヽヽ、汝は我を欺く筈なりしよな、汝が今少し若くば、一口に喰つてくれんを、そはともかくも來りて見よ、久しく人肉に饑えたりしが今日はまた如何に仕合せよきとぞ、明日仲間なる三人の山鬼どもに、夕飯を振まう樣、約束し置きたるが、さても善き馳走を得たる哉、善き馳走を得たる哉」と。氷柱の如き水鼻をスヽりあげて喜びつゝ、兄弟等を一人一人、臥床の下より引出しぬ。兄弟たちは山鬼の膝下にひれ伏して、憐を乞ひしかども、この山鬼は山鬼の中にても、最も無慈悲の山鬼なりければ、不便とも何とも思はず、其肉の旨さ軟かさのみを思ひ、兄弟たちの云ふとは耳にもとめず。味噌を少し濃くして來たらば、如何ばかり美味しき汁の出來べきぞと、女房に云ひつけて、山刀を取り持て來らせ、その山刀を取つて料理はじめ、先づ小き奴よりと、膝坊主を捕へて、喉より斷んとしたるが、女房はそを推し留めて、明日

の夕の肴を、必ずしも此の夜深けに料理し玉はずとも、明日の朝にも、晝にも、十分料理し玉ふ機會はあるべしと、云ひければ、山男は答へて「ナニ明日とや、凡て肉と云ふものは、殺して暫時置きたる方、軟らかにして宜きものなり」と云ふに、女房は猶ほ「去るにても、既に牛もあり、羊もあり、綿羊もあり、子羊もあり、肴は臺所にあり餘れるを、左樣に急ぎ玉ふ事かはと、機嫌を取るに山男も實にもと思ひ、「さらば渠等よりか瘦せぬ樣、好く飯食はせて寐かし置けと云ひつけければ、女房は有りがたしと喜びて、渠等に、腹一杯夕飯を食べさせたれど、兄弟たちは一夜の生命を贏けしものゝ、恐ろしくてあるにもあられねば、膳に向ひても、一口も喉に通らず、食べぬまゝに寢床に這入りぬ。そのあとに山鬼も酒の坐に返り、明日其友に誇るべき、上なき肴を得たる愉快に、思はずも酒を過し、是も亦臥戸に入りぬ。

こゝにかの膝坊主は、中々に寢もやらずして、熟々と思ふ樣、渠女房に說かれて、一旦は明日までと我等を許したれども、渠夜中に目を覺まさば、心を翻して、忽ち我等を屠るべし、如何にせば此の難を遁るべきやと、種々智慧袋を絞り、忽ち一計を案出したり。元來此の山男に、數も揃ひて七人の女子あり、今夜は暮るゝと直ぐに寢ねたり、この女子等は、皆大なる一個の床に頭を並べて一處に寢ぬ、いづれも金の冠を冠れり、猶ほ他に大なる床ありて、七人の兄弟たちは、取も直さず此の床に寢ね、同じく一處に頭を並べたり。さればかの膝坊主は、人知れず床より這ひ出て、自身と兄たちの帽子を取つて、女子等の床に忍び、七個の金の冠を七つの帽子と取り代へて、然る後また臥床にのぼり、山鬼の來るを、今か今かと待ち設けぬ。案に違はず、山鬼は夜中に目覺めて、渠等を寢時前に屠らざりしとを悔ひ、寢床より躍り出でゝ、太刀を取

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

り出し、靜かに渠等が寢處に來り、眠れる子どもを手搜り、手に觸るゝもの皆金冠なるに驚き、我殆んど誤まらんとせり、昨夜餘程飲み過しけん、危なかりける事どもよ」と、次の寢處に來り、帽子首をさぐりわたりて、「是よ、是よ、肴はこれよと、一人一人七人まで、其女子の喉を斷ち、仕濟したりと、心うれしく寢處に返りぬ。

うつらとも目どろまざりける膝坊主は、其計の圖に當れるを見、山鬼の鼾を聞くや否、其兄弟を搖り起して、速かに帶引しめて、自個の後に隨はしめ、忍び〳〵に床を脱けて庭に下り、庭より壁に取つき、壁より、外に飛び、足にまかせて走り去れり。その明る朝、山鬼は遲く起き、昨夜の子どもを起して、衣物きせてやるべしと、女房に云ひつけければ、女房は夫のやさしき言葉に、定めて子等の生命を助くる心なるべしと、よろこびて梯子をのぼり、其女子の首をならべて屠られたるを見、氣絕してうち仆れぬ。下には山鬼、待てども〳〵肴の來ざれば、躍起して梯子を上りその躰たらくを見て震怒し、「チエー死したり、おのれ、小ワッパ寸斷寸斷にして腹いせせんと、先づ女房の面に水吹きかけて我に返らせ、「蚤く〳〵我が七里靴を持ち來れ、速かに小ワッパどもを捕へ來らん」と、一足七里の靴を穿ち、大急ぎに急ぎ來ければ、父母の家ちかく遁れ來りし兄弟らに時の間に追ひつきたり。膝坊主は早速小くくぼき、七里靴の容る能はざる岩穴を見つけて、兄弟と其裡に入り、山鬼が何を爲んとするかを窺ひしに、山鬼は七里靴の爲に痛くつかれ、暫らく休まんと、渠等が遁げこみし岩に腰かけ、いつしかも眠りころげぬ。されど鼾聲雷の如くなるに、兄弟は身震ひして恐るゝを、膝坊主は兎角に皷舞して、一同難なく家に歸れり、膝坊主は猶ほ村人に告げ、村人を驅り催して再び來り、寄つてかゝつて、眠れる山鬼の足よ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

り七里靴を靜かに脱き、遂ひに脱き得て村に持ち歸れり。

七里靴は甚だ觀るに美しく、且つ幾百足と云ふ人の靴になるより、村人の中或ものは之を割きて分つべしと云ひ、或ものは賣りて金に代ゆべしと云ひ、膝坊主は國王に奉つるべしと云ひ、評議區々なりしが、遂に膝坊主の議に一決し、誰彼都に持ち行きて國王に獻じ、且つ詳かに之を得たる次第を具狀しければ、國王の御喜び斜めならず、希代のものなればと、王室の寶の中に加へられ、村人に多くの金を取らせ玉ひ、是れ併しながら膝坊主の智慮の致す所と、殊に膝坊主を召し出され、村人に賜ひし二倍の黃金を下賜せられ、猶ほ王家に留りて奉公致すべき由仰せ出され、過分の俸給を下賜せらるゝ事となり、樵人夫婦は、膝坊主の出世に由りて豐かに世を送り、其後山鬼も死たる由聞えければ、膝坊主は、命の恩人なりし、其女房を迎へ取りて養ひ仕へ、其後益々智慧を顯はしければ、國王の御覺益目出度、遂に國の大臣まで昇進し、上もなく幸福の身となりて一生を終へぬ。

繪畫

畫學の栞（九）

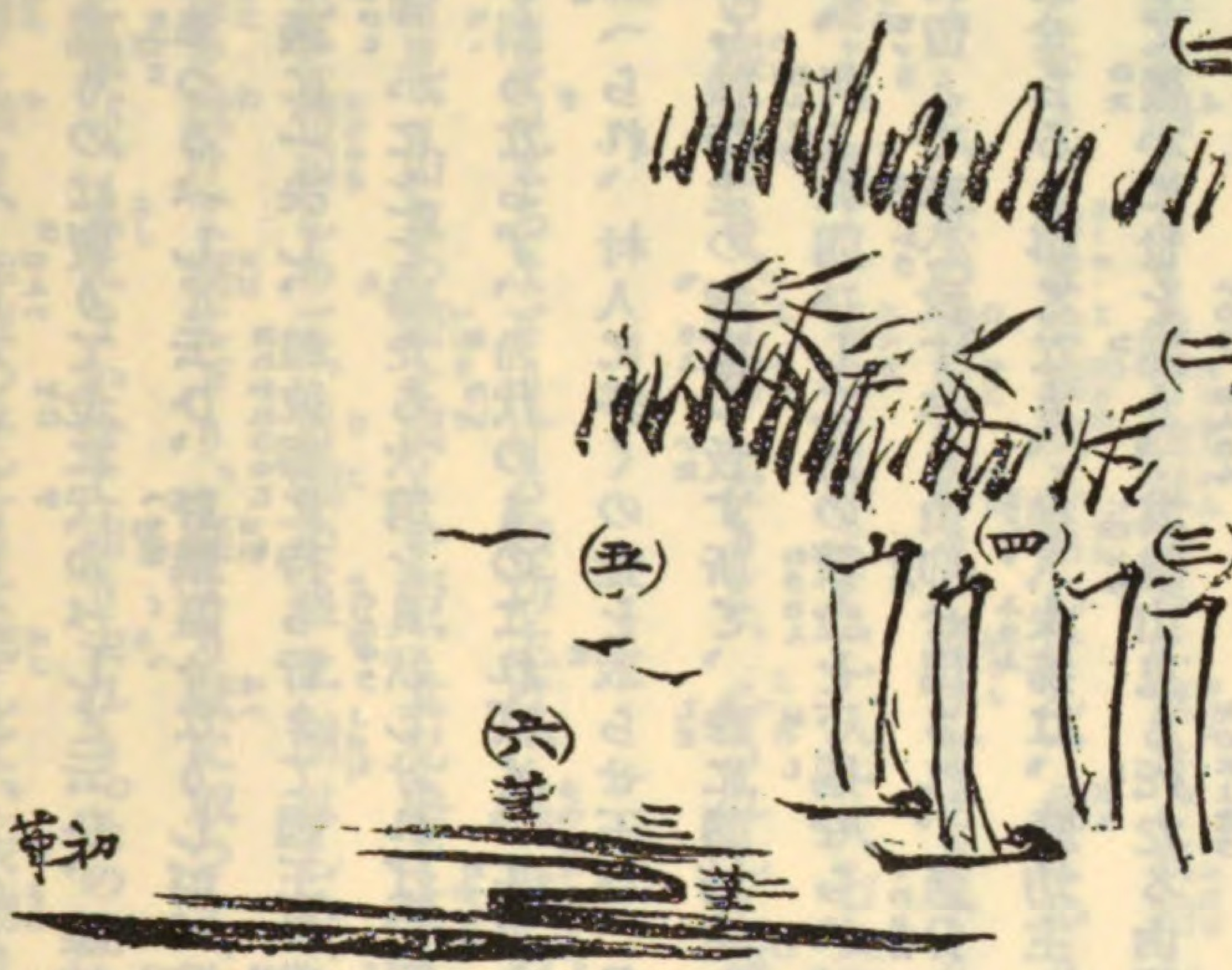
米齋

山水小景、左の順序に依て畫くへし、

（一）蘆莖をゑかく、莖の數、及びその長短は必しも如此なれといふにあらず、只宜しくその勢をとつて形似下に拘泥すべからす、

（二）葉を畫く、これも形にのみ拘はるべからさること前の如し、

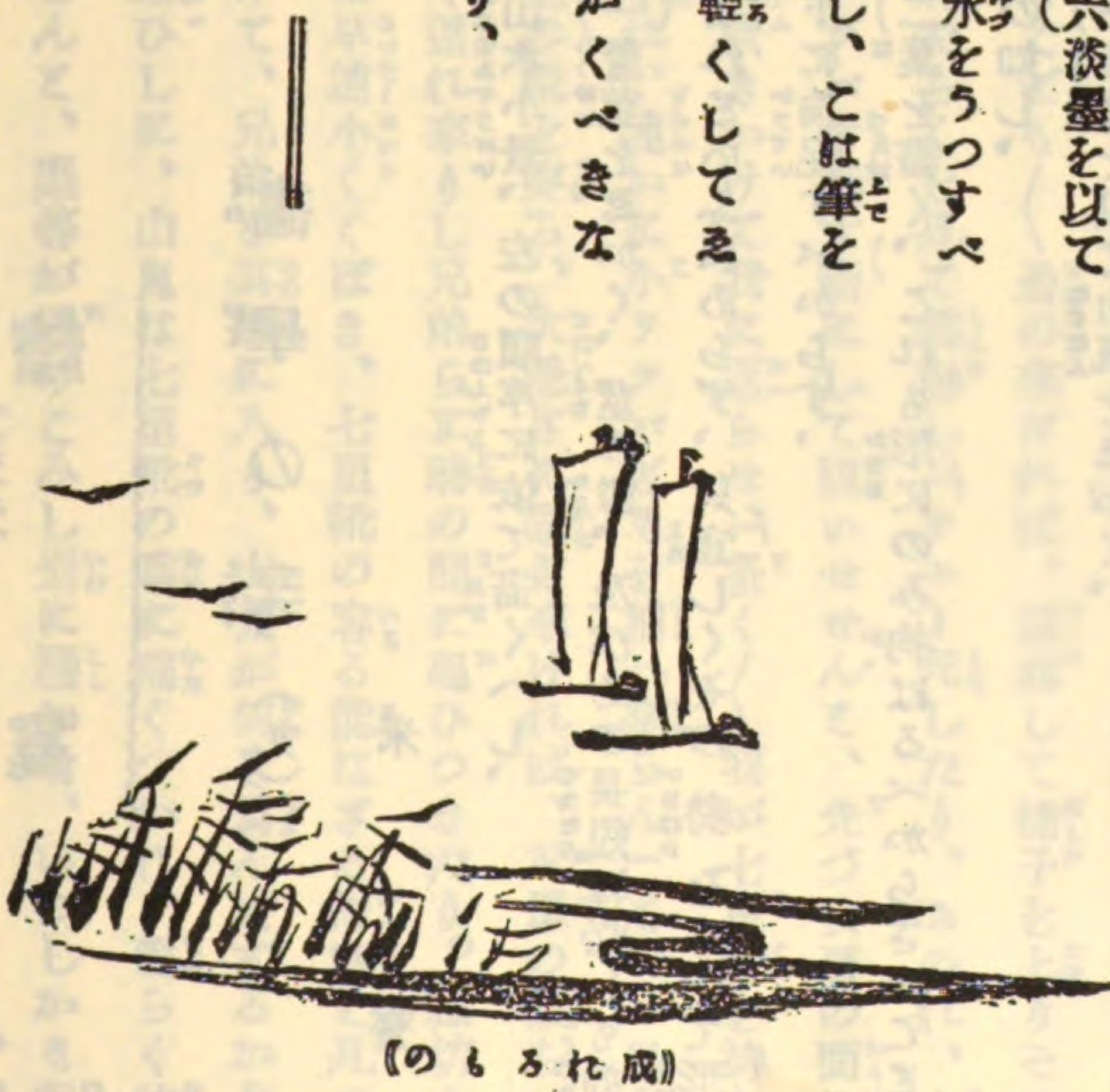
（三）淡墨を以て白汎をゑがく、



(四)濃墨を用ひて船躰をゑがく、前なるをさきにし後なるをあとにすること勿論なり

(五)飛鳥をうつす、

(六)淡墨を以て水をうつすべし、こは筆を軽くしてゑがくべきなり、



《成れるもの》

無聲詩話（十七）

應擧の書風に倣ひ、遂に一家をなしたるもの、呉春あ

りき。
呉春、月溪と號す。本姓は松村、字は伯望、又存白とも稱せり。京都の人にして始め醉月を師とし、又蕪村に學び、後應擧の畫風に依りたり。嘗て攝州呉服里に棲遲せしを以て呉を氏となすに至りぬ。



山水は彼が最も善くする所にして、草木花葉亦た妙なり。其沒骨草畫の如き、清瑩輕淡限りなきの趣致あり。

文化中七十にして沒す。
弟景文、亦花鳥を寫生するを極めて巧にし、清潤にして豊婉。弘化元年六十五にて沒す。子藻は字、華溪は號。
門人に横山清暉長谷川玉峯あり。月溪の門人に岡本豊彦柴田義董あり。
此派の畫家は住して京都四條街近傍に在りしを以て、世人呼て四條派といへりき。
又豊彦の門人は鹽川文麟あり、字は子温、木佛道人と號し、山水に能くす。今の幸野梅嶺野村文擧內海吉堂山田文厚等は、皆其門に出づ。
而して外に京都近世の大畫家には岸駒あり。又子岸岱ありき。

家政

暑中休暇と學生

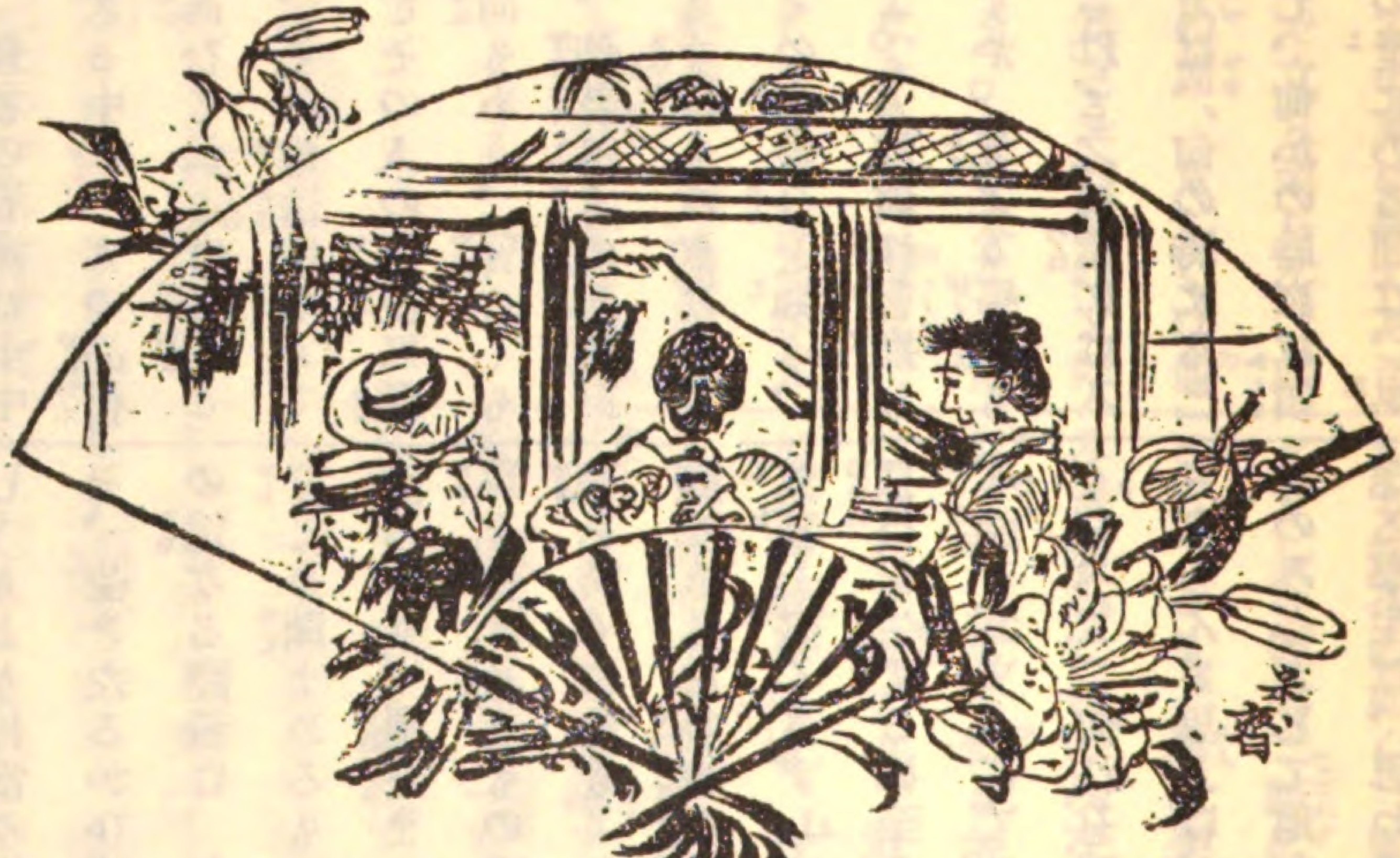
此世に程遠き學校の二階より解放されて、丁稚小僧が年期奉公、明けたる時と同量の喜びを以て家に歸る夏休こそ、學生に種々の徳性を吹き込み、種々の處世法を刻み込むには、最適當の時なり。最も適當ならざるべからざるその時を、徒々無益に費やし、若しくは有害ならしむるものあるは嘆かわしきとならんや。夏休に歸る時はいつも大試驗の後にして、顔色青ざめたる時なり。暑さのために衰へたる時なり。半年の勉强につかれたる時なり。かくて學生は半ば倒れたるもの丶如く、目は窪み、足はよろ〳〵として、家に歸り來る。さてその父母は兼ねて明け暮れ遠方に在る小供の事を忘るゝともなく、案じ居るが、夏の休も來れば、久ゝにその喜ばしき顔を見んと待ちに待ちたる折しも、我が子は歸り來たれり。飛び付かん計　に喜んで迎へ見れば、顔色は悪しく、身躰いたく衰へたり。忽ち父母の喜びは憂ひと變わり。樂しみは心配　更われり。此に於て朝夕滋養物を與へ日々散歩に連れ歩き、少し位の過は見へても責めず、他人より見れば見苦しき程あまへても父母にはわからず。加之その弟妹は兄や姉等の歸りしを喜んで、その周圍に小躍りし、彼の物を持ち來りて與へ、之を引き出だして見せ、一家擧つて精神を盡くし、心を盡くし、力を盡くしてその喜びを爲さんとす。其間に三週間や四週間は夢の如く、早く消へ去りて再び學校に行くの時となる。

かくして送りし夏休暇の結果は如何ならん乎。彼は面白かりしならん。彼は樂しかりしならん。その健康は回復せるならん。されど不遠慮なる父母兄弟より受けたる愛情は、返禮を要せず。少々の無理も氣儘もその

まゝにて通用し、家庭は學校より面白くして、自由のきく善き處なりと夢み。繋がるゝが如き學校の規則八釜しき教師の命令は、いやとなるの恐れはなきや。よし之等はなきにせよ、少なくとも何の益する所なくして夏を過ごすならん。かくては大切なる夏休暇をおしき使用方にあらずや。

何を教ふべきや

夏休暇には脳を勞するとは悪しかるべければ、脳を勞せずして教ふべき事多きが中にも、當今の學生に最も欠けたるとは、精神の足らざると、物事に堪ゆる氣力のなきと、謙遜ならざると、禮儀作方を



知らざると等なり。精神氣力の無き者には、英雄の傳を讀ましむるも可なり。心得となるべき話を聞かしむるも可なり。こはその教ふる人の方法に一任すべけれども、謙遜にして、父母長老、教師に服從することゝと、禮義作方を重ずるとは、學校に在りては餘り習ひ得ず、父母も時に忘るゝ問題にして、しかも處世には必用の問題なるが故に玆に一言し、父母の注意を促がさんと欲するなり。

今滊車に乘ぜりと假定せよ。その中の人々の談話と、容貌と、作法とによりて、大抵はその性質を知るを得べし。學校を參看

しても、看護婦の看護を受くるも、最初の看察は十中八九は當るを得べし。禮義は知らざる中に、人の品格を增し、覺へざる中に人の地位を高むと云ふは名言なり。禮義あつくして謙遜なる人は、その作法によりて之れを知るは勿論なれども、自然とその人の容貌に顯わるべし。今二人ありて一人は學問もあり、賢こくもあれど、禮義も作法も知らずして、傍若無人の擧動計りするものと假定し、一人は學問も才能も次ぎなれども、萬事に度ありて、何の時にもその身の分を知り、爲すべき事を爲して行くと假定せよ。人は何れを推して、己れの守護者、相談相手となすや。元より學問も入用の時は、入用の事もあらん。されど之は常には入用計りはあらず。只だ他の一人の方は、何の時にも己が後に立たしめて、身の守りとなし、何かの時には頭役に推薦して、恥づる處なし。人の世にある間は、他人より愚と見られて侮蔑を受くる程愚かしきことはなし。人より相當の信用を得て社會に推尊せられてこそ、生きたるかひもあるべければ、之れを得るに最貢の道なる禮義は、忽なすべき事にあらず。特更婦人は賢こき聞えあるものも、男子に比して幾分の欠けたる處ろあり、隅々まで行き屆かざる所ありて、他人の侮蔑を受け易きものなれど、禮義ある人のみは他人の侮蔑を防ぐに最もよき武器也。

禮なき人は物事亂暴にして、不丁寧にして、爲すべき義務を盡くさずして恥じず、心にかけずして、大なる拔目を生ずるに至る。誰れか禮義を好まざる人かある。不禮を爲す人にても、禮義厚き人と不禮なる人とを見くらべて、何れを取るやと云へば、己れも禮義厚き人とならんと思ふは、皆然らざるはあらざれども、學問にのみ心ざして他を思わざる人々の中にのみ、朝夕を送る學生は、思わず知らざる中にその美風を失ふに至る。中にも下女下男を多く使ふ家にては、格別上の者

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の禮義ある樣心得べし。上に立つものの禮義亂るゝ時は、下々の亂暴は甚だしくして、一家の風は聞ても汚がらわしく、見るもいとわしきに迄で立ち至らん、或る人は禮義作法を以て然るべき集會の席、もしくは他人の家に招かるゝ時にあらざれば、爲さゞるものゝ如く、爲し得ざるものゝ如く考ゆれども、こは大なる間違なり。さる場所にては常に謹しみなき人も、謹愼、自然に出づれば、反て注意を爲さずともよき位なれども、家にありて世話しき事務をあつかふ中に、禮義ありて、拔け目なく、人に付け込まるゝ欠隙なき樣に心得るは、反て必要なる事なり。

服　從

今日の小供は、未だ東西も解からざる幼年にして、小見共進會ありて、競爭し、十一二歲にして美術作文に長じ、十五六歲にして鄉里の人に尊重せられ、廿才に足らざる若年にしてもはや一ぱしの大政事家、大經濟家、大學者と成り終れり。これは恰も室の中に生だちたる梅花の如く、寒尚ほ深き時候はづれに最早滿開となりしもの也。誠に此等の人を稱して茄子のうらなりと云へるも、眞に果の熟せるにあらずして、たゞ色のみ黃ばみたるのみなればなり。その頭の高く上りて、目上の人をも低きが如く思ひ、父母をも己れに及ばざるが如く侮どり、敢て服從と云ふとを知らず。祖父母が何か敎ふれば、古るくさき七十年前の事を何とて聞くを要せんと思ひ、父母が誡しむるとあらば、天保年代のものは天保錢すら通用せざる世なりと罵り、傲慢たゞ誇り世間を一呑みにしたる割合には、人より用ひられず、信ぜられず、貴まれずに、不平の中に悶へつゝ、一生を過ごすに至る。實際の上より調査しても解るとなるが、世の中から成功する人は、大低幼少の時より謙遜にして、物事に丁寧に、相當の禮義ある人なり、元より謙遜と云ふとはやたらに頭をさげて、人に

下る計りを云ふにあらず。道理のなき時は、一分も人に下だらずして可なり、隨分目上の人にも逆ふべし。されど平素は温厚にして謙遜ならざるべからず。家にありて父母に隨ふを得ず、學校にありて教師に服するを得ざる人は、女子ならば他人に嫁して家に絶へ間なき風波を起こし、男子なれば人と事を共にする能はずして、つまり風來者の一生を終ふるに至るべし。

今や夏休暇は近きにあり、父母たるものはその子の將來を思ひ、その一生の爲めを思はゞ、彼等を柔さしき顏を以て迎ふると共に、一の苦みを以て之を制し、野馬の如く行きなりに長ぜんとする學生を、物の役に立つ樣に、曲げつ敎へツ、此世に近かき人間となして、再たび學校に歸すとを忘るべからず。

如何にせば健康を保つを得べき乎

過日萬國婦人矯風會々頭ウ井ラヤ女史が、ロンドンに遊び給へる時、有名なる醫師を訪ひて如何にせば健康を保もち得べきやと問ひ給ひければ、左の規則に隨ふ人は、たとひ虚弱のものと雖も、必ず健康に至るべしとの答を得たりと云ふ。

朝の養生

朝起き出づれば先づ口をそゝぎて半勺計りの白湯、もしくは冷水を飲み、それより微温湯にて身躰を拭ひ、更らに乾きたる布片にて、少しく赤くなる迄身躰を摩るべし。それより襟胸腹部等の餘り堅く緊らざる衣服を寒くなき丈けに着けて、暫時運動し、歸りて食事を爲すべし。食事は朝、晝、夕の三度の外、決して間食を爲さず、成るべく滋養に富み、消化の易きものを撰むべし。朝食は八時頃なるべく、食物の種類は成るべく淡白を可とす。例へば新らしき食ぱんか、一寸火取りて狐色になりたる食ぱんに、バタと卵の半熟をそゆるか、少量の雞の雛の肉か、極々新鮮の魚肉ゝもし

くは鹽にせざる獸肉牛の舌等をそへて食すべし、食事の終へんとする時、半勺計りの茶、牛乳もしくはコーヒーを飮むべし。尤も茶は一二分間湯の中に入れたるものを可とし、三分以上となれば養分を失す。

晝の養生

晝食は十二時頃なるべし、新らしくして好く出來たるパンに、ジヤガ芋、青物の煮たるもの、豆類等の如き澱粉質の多きもの、及び菓物の煮たるものを用ゆべし。食事の終らんとするに臨みて新鮮なる水を飮むべし。

夕食の心得

晝食より四五時間、もしくは五六時間を隔てゝ夕食を取るべし。之れには成るべく簡易なる食物を用ゆるを可とするが故に、新鮮なるパンを一寸火取りたるものに、少量のバタと煮たる魚肉と、カツレツ、冷肉、雛の冷肉等を用ひ、食事の終らんとする時、支那茶を三分計り熱湯の中に入れたるを飮用すべし。それよりは眠りに就く前に、五勺計りの白湯、もしくは冷水を飮むの外、他の物を決して食すべからず。

常に心得べき事

甘きに過ぐるもの、辛らきに過ぐるもの、乾もの、鹽もの、酢のつよきもの、長貯へたるもの、熱つ過ぐるもの、冷すぎるもの、氷、ジヤム、熟せざる菓物、熱し過ぎたるもの、固きもの等は、何れもあしゝ。牛肉のスープも益なし。一日に少なくとも半時間づゝ、二度は散歩すべし。夜は十時を限りて臥し、床に入りたれば、考へ事は大禁物たり。室內の空氣は常に清潔なるべく、病氣は自然法によりて醫するとを務めて、藥を出來得る丈け避け、何事も規則正しくし、睡眠は夕食後、少なくとも一時間の後に於てし、心は常に愉快に持つべし。

是等は元より知れきつたる事なれども、之を實行する

とせざるによりて、身躰の健康を保ちて、一生を幸福に送りもし、不幸に送りも爲すべければ、之を讀む人は、其心得により、規則を生かしもし、死しも爲し得るなり。

夏の衛生

一利あれば一害あり。夏は小供の發達速かにして、身躰も生長すると仝時に、怪我、病氣等も、冬よりは多し、冬は戸内にのみ居るが故に、不慮の過を來すと少なけれども、夏は之に反して、戸外にのみ出づるが故に、危うきと多し。母の注意の必要なるは之れより始まる。

○汗腫物　大人にも間々あれども、小供は格別『汗も』とて、小さき腫物の汗のために發するものあり。その腫物の少さくして群集する内は、天花粉、葛粉等を散布せば功あれども、あせもの親とて、中に大なる腫物の生ずるとあり。これは能く〳〵手當を爲さゞれば、次に〳〵と擴がりて、起居動作に不便となるに至るべし。時に小供は癢ゆきを堪ふると能わずして、掻くが故に濃汁所々に散して、非常にひろがるとあり。もし一つにてもその腫物を發する時は、早く米の糠汁にて腫物の上を洗らい、清水にてまたその汁を洗ひ去りたる後へ亞鉛花膏と云ふ膏藥を求めて塗るべし。一日中少なくとも三四度づゝ如此すれば、膿化せるとせざるとに關せず、そのまゝにて枯れ失すべし。膿化せしものは、成るべく孔を明けて膿をおし出し、後を洗らひて、先きの藥を塗り付くべし。もはや膿の出でざるに至れば、膏藥は付けざるを可しとす。

○上せ眼と乳かす　初つ生れの小さき小供は、特に父母が大切になすの餘り、温たか過ぎて上せ眼となるとあり、長して後も、屢々眼の邊の赤くなりて、掻くな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

るとあり。之れには藥屋より硼酸水なるものを購ひて、茶飲茶わん一ぱい位を生ぬるく成る迄溫ためて、切の清潔なるものをひたして、一日數回眼を洗ふべし。此の藥は小供の舌に乳かすとて、白きもの付きて取れざる時に洗滌すれば、取り去るの効もあり。乳かすは舌を屢々洗わざるより生ずるものにして、甚だしきに至れば、乳兒其の傷みに堪へずして、乳を吞まざるに至る。特に夏は舌を屢々洗わざれば、胃病腸の病等を發するとあり。

○皮膚病　夏分汗の出づる頃は、皮膚病の傳染特に甚だし。凡て皮膚病は身躰の不潔より來るものなれば、已にかゝりたると否とを問はず、屢々入浴するか、もしくは手拭にて拭ふべし。慢性ならざるものは、度々洗ふによりて自然に治るもの多けれども、慢性に至りては昇汞水の如き劇藥を塗末せざれば治し得ざるに至る。劇藥は醫師の手を經るにあらざれば、求むるを得ざれば茲に書せず。

○眩暈　夏向は大人小人に限ぎらず、屢々目まいするとあり。目まいのする時は、頭部と足とを高くし、腹部を凹くゝして、靜づかに臥せしめ、冷水を以て頭部を冷やし、成るべく運動を避くべし。

○頭痛　頭痛にも種々ありて、或は腦のあしきために頭痛する人もあり、胃病より來るもありて、一定せざれども、凡て患者は大小便の通じを能くし、軟らかき食物を食し、運動を怠たらず、酒類を嚴禁し、劇務と劇動は勿論、精神を使ふを止め、空氣の清潔なる處に住居すべし。

女子の銀行員

種々の仕事の起るにつれ女子の職業もいよ〳〵廣くなりて相應に自活するもの多く、從つて女子を輕ずる風

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

習の漸々に消え去るは目出度限なれ共、まだ〳〵日本には舊習の深く染め殘りて急激に改良せむとする結果は却て思はざる反動の起るものなるは、數年前盛なりし女子敎育の有様を見ても誰しも多少顧る所あれば、徒らに學者を造らず良妻を得て滿足する樣になり、又女子職業學校等の設立もあつておい〳〵實地に其用を試むるやうになり、電話交換所又は紡績會社等それ〳〵好結果を得たれば之を官衙に使ふべしと迄論ぜし人もありしが到底も西洋の如く普通の諸事務に使用することは社會萬般の程度が之を許すまで進歩せざる以上は、よし女子其ものは適當に成し得べき事も世の中の舊習は之を退くるものなれば、實際は事の外六ケ敷ものと言ふべきなり。

然れ共女子の性質上尤も適當なる仕事はまだ〳〵澤山あり、今其才智學能等の上よりは言はず、普通女子の性質の上より見るも、銀行事務に於けるが如きは蓋し其一ならむ。

一概に銀行事務と言へば其意義廣けれ共今茲に言ふ所は其一部なる金錢の取扱に關する金庫の事柄を指示す、思ふに現金の取扱は注意に注意して過失なく熟練の妙手迅速に運ぶを能とすれば其心は精密ならざるべからず其手腕は輕妙ならざるべからず而して其これを爲すに當ては謹愼に謹愼を加へて只だ過失なきやうに不足なくはかどれば事既に足る、敢て、金融の有様金利の高低等に眼をくばり其の全般の掛引を支配する人は夫れ相應にあるものなれば精神を使ふ仕事に付ては今は置て問はず只だ此現金取扱に關する事務は今日各銀行一般單に多年の熟練を以てするのみなれば、寧ろ過失の起り易き血氣壯なる少年を危みつゝ使ふより先づ過失の少き性質の女子を使ふのまされるに如ざるべし。

澁澤氏の直話なりと言ふを聞に、銀行員にて其身を誤

るは一に金に關することより外なく、其金に付て過失の起るは、義理人情の柵に餘義なくせられて一個人又は一會社への貸付等より起る損害の爲に蒙りし過失の類は支配人又は上地位の人に限り、又は私利を營みて過つもの或は徒に妄想にかられ米相場株式等に誤られて過を起すもの、この類は中位の輩に多く、それより下りて色慾に迷ひ又は身分不相應の道樂より起る過失は重に下役に多く、而して此類の一番多きは前後無分別の壯年に起りやすき由なるが、思ふに此點に於ても女子は男子程過失の起るべき恐れ多とせず、殊に女子の天稟なる手頭の技術それに由て紙幣を數ゑ珠盤を置き簿記をつける事なぞ單に熟練を以て爲し得べきものに至つては女子決して男子の下に立ざるべし。

聞く所によれば大坂三井銀行支店にては此度女子を雇入れ現に金庫の事務を取扱はしめ居る由、これ實に日本にて女子を銀行に使用する初なれば、其結果の如何によりては此道の爲に大なる利益を與ふる者なれば、吾人はひたすらに其好結果のあらむことを希望するなり。

午睡

やさ生

追々暑氣に向ひ、世間到る處に午睡の鼾聲を聞くも遠きにあらざるべし。午睡は今更事新しくいふまでもなく、健康を害し、又見苦しなんど、たとへん樣もなし、殊に婦女子が、襦袢一枚にて現をぬかし前後忘却、高鼾するが如きは、實に不躰裁至極にあらずや。不躰裁とは知りつゝも、炎立つ如き暑さにては、我知らずコクリ〳〵と眠ることあり、かゝる時に於て、謹み給へを百萬遍述ぶるとも益なかるべし。

午睡は怠惰より來るものにして、勤勉なる人は、午睡をなさず、されば業務の餘暇には、身を怠惰に處せず

して有益なる事業を撰み、これに服すべし、斯くするときは、睡魔は自然と去るべきなり、勿論自己の心がけ一つにて、務の如く厭や〳〵ながら從事するときは、從事せざるものと、五十歩百歩の違にて、睡魔は遠慮なく襲ひ來るなり。

暇ある時に爲すべき事業にして、細君子女に適當なるは、手内職に上越すものはあらじ、内職に就ては、婦女子職業案内に於て、精細に記述しあれば、好まるゝものを撰擇し、夏といはず、唯今より從事せらるべし、僅か一厘二厘といへども、容易く得られざることを覺らるべし、かくて一と夏午睡の時間に得たるものを計算し給はゞ、定めて一驚を喫せらるゝならむ。

父母勤勉なるときは、子女またこれを見て、われに職を與へよといふべし、子女の内職する殊によし、然れども注意せざればならぬことあり、子女に綿密なる内職を强るは、發育に害あり、故に適度ならんを要す、又子女の得たる報酬は父母の嚢中に入るべからず、必ず子女のものなりといひ聞かして管理し置くべし、而して請求ありしとき又は祝日等に、幾分の使用を許すべし、然れども自ら粒々辛苦にて得たるものなれば、如何に必要迫るといへども、吝んで費さゞるあり、これが習慣となりては、容易に拔く能はず、されば有用なる場合に臨まば、悉く消費するも遺憾なきよう仕付るが肝要なり、吳々も父母は勘定を曖昧にして己の腹を肥すなかれ、若しかゝることを爲さば、頑是なき子女といへども、己のものを奪はるゝときは、怒りて父母を怨み、以後内職は勿論すべての事に怠惰するに到るべし、

苺の料理さま〴〵

赤く美わしくして人の目を引き付け、植物質の酢と、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

糖分ありて、健康を保益するものは、此頃の苺なり。病人を慰さめ、小供の涙をぬぐひ、學生の學問を勵まし、勞働者の疲勞を安むる苺なり。只さへも滴たる滴に舌を沾ほせば、三年の生命は延長するの感あるに、之を然るべき法を以て調理せば、更らに三倍五倍の美味を増すを得べし。

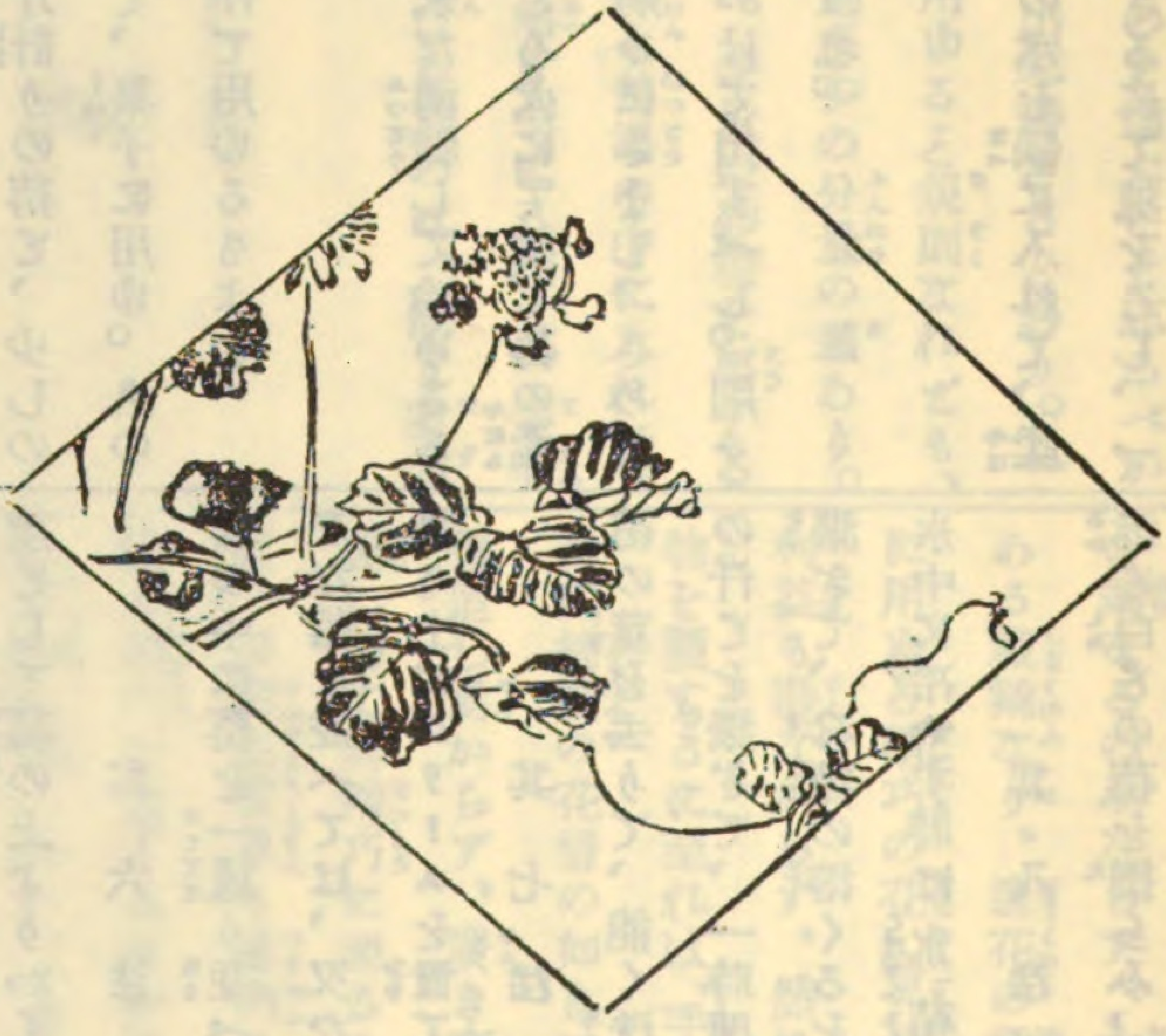
其一法

能く熟したる、されど腐敗せざる苺の一斤計りを取て、莖を去り、洗ひて之を器に入れ、上よりさじか、杓子にておしつぶし、どろ〳〵となりたる時、砂糖一斤と雞卵の白味、二三個と、牛乳五勺計りを入れ、之れを氷水もしくは冷水に冷やしながら、能くかき混ずる時は白き泡となりて、固くなるべし。之れは白雪苺と呼びて、賓客に供するに美觀、美味、共に備われり。

其二法

苺水の製法は、苺の熟し過ぎざるもの一斤を、摺鉢にて摺りつぶし、之を木綿の袋に入れて、絞ぼりて、水計りを器に入れ、之れに白砂糖一斤を加へて、火上に置くと、十五六分乃至廿五分なれば、飴色のどろ〳〵としたるものを得べし。飴色になりたれば、鍋を火上より下して、少しく冷まし、瓶に移して、冷水の中に入れて、暗き所に冷やすべし。

其三法



菓子苺と云ふは、五勺計りの麥粉の中へ、三四個の卵と五勺計りの牛乳と、少量のバタと、ソーダ一サジとを能く混じ合せて、その中へ半斤計りの苺と、少しの砂糖とを入れて、燒鍋にて燒きて、菓子に用ゆ。人の好みによりて、レモンの汁をかけて用ゆるもよし。

其四法

第二法に隨ひて作れる、苺水の未だ沸騰して冷めさる中に、熟し過ぎざる苺を投じ、とろ火にて煮て苺の柔かくなりたる時引き出し、汁と別々にさまし、さめたる上にて苺の上に、先きの汁をかけて出すべし。別々にせざれば果の崩るゝ恐れあれば也。

其五法

五勺計りの苺を、之を浸す丈けの水を鍋に入れて、柔らかくなる迄、之を煮つぶしてざるにて塊をこし、一オンスのバタと、コップ一杯の砂糖と、二三個の雞卵の黄味とを合して能く混和せしめ、之を硝子若しくは錫の器に入れて冷水上に冷まし、その能く冷へ上りたる時先きの卵の白味計りを、能く泡立たせ、固まるを度として苺の上よりかくべし。

其六法

器の中に苺を一通り並べては、その上に砂糖を置き、又た苺を並べては、又た砂糖を置くと五六層にして、最も上にクリームを置て、氷水にて冷やして食ふべし。

其七法

苺の莖を去りて、能く洗ひ、之に適宜の砂糖とレモンの汁とを灑ぎて、一時間計り置き、その上より氷水を灑ぎて、砂糖の溶くるを度として、錫の器に入れて、氷中に冷やす時は氷苺を得べし。

其八法

赤と白との苺を撰らみ、氷水に浸すと暫時にして、引き上げ、籠の上にて水を滴らし、砂糖の上に轉ばして、衣を着け、硝子の器に盛りて出すべし。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

其九法

凡て苺の鑵づめを作るには、苺の成るべく熟し過ぎざるものを撰ぶと、新鮮なるものを撰ぶとを忘るべからず。新鮮ならざる時は、或は出來得ざるとあり。一斤の苺に付きて、半斤の砂糖を用ゆると規則なれども、熟したると否とによりて、砂糖に多少の分量の差あり。即ち熟せざるものは酢きが故に、多量の砂糖を要するなり。鑵に入るゝの法は、先づ鑵を熱湯の中に入れて、温め置き、さて煮たる苺の未だ熱き中に入れて、手早く鑵の口をふさぐべし、凡て鑵づめものは、餘り煮過ぎたるは禁物たり。

手藝案內

人造の花

今や三春の紅花落ち盡きて初夏の候となり萬緑叢中薔薇の香や芍藥の名殘を止むるのみ、此時に當り、天上を學びて人造の花を咲かすも面白き業なり、啻に面白き業なるのみならず、女子手藝中高尚にして而も利益ある職業なり、造花の業熟達するに於ては女子の頭飾に用ゆる精巧の花簪を製造し得るに至らば、收得の利益も尠なからず、然れども花簪の如き細かき細工物を製するに至れば、手練の稍上達したるものにして、殊に摘製の花簪の如きは非常に熟達するにあらざれば製造し易からず、廣き東京市內に於ても摘製の花簪を製し得て其精巧に至るものは指を屈する程なりといへば、其製造賃銀も通例の比例にあらず、摘製の細工は最も精巧を製するものなれば、男子よりも却つて女子の天性に適したり、玆に造花の案內を記するは最も單簡なる花簪、小供の玩具にする）又は床の間の花籠等に挿む造花の方法なり、これはほんの手習なれば

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

追々此技の熟達するに從ひて精巧のものを製造し得らるべし。

造花に要する材料は寒冷紗、絹（二品に代ゆるに紙を以てするも好し其手習の間は）銅線紙（これは莖を卷く爲に用ゆる）、糊、染粉、糸にして、又製造に要する器具は火鏝、鐵製打貫型これは種々なる形あり、先づ要するものは單箇なる花形、及葉形、然し初の慰半分の間は鋏を代用するも可なり、鋏、締道具（出來上りたる葉を壓搾する）等なり、花の幹には振よき木の枝を撰むが好し、又其花の櫻ならば櫻の枝、椿ならば椿の枝を用ゆるが自然に適ふなり、扨花の造り法はいろいろあるべけれども其花の眞色に擬し、寒冷紗、絹又は紙を染粉にて其花の色に染むべし（寒冷紗は水にて少し其面にある糊を落し乾燥したる後染るを可とす）而して染付は頗る困難なるものにして動もすれば初の色と染め上りたる時の色合と非常の差違あることあり、これは常に此業を取る商賣人と雖も殆ど難儀とする處にして、紺屋が水加減、乾加減又は風の吹工合にて織物の染色を異にするが如く、素人には一寸六ケしき業なれども、追々經驗を積むに至りては自分の思ふ色合を得ること自由なるべし。

染つけも終りたらば陰乾にして日光に當らぬやうにし（日光は變色の恐あり）全く濕氣を去り四折又は五折にして其の花に適したる打貫型又は鋏を以て花の形を出し、火鏝にかけて花片の形に曲げ、花片の出來上りたらば之を銅線の先に貼付せる花の心に一個宛貼りつくべし、花片の配置成立するを見ば更に蕊を製作して其中心に貼付すべし、葉は大抵萠黄色なれども植物によりては其色に濃淡あり又青朽葉と稱し半黄と半緑なるものあれば、其濃淡に能々心して染めつくべし、陰乾にて充分乾したる後、花片を製するが如く打貫型又鋏を以て葉の形に打拔き、之を四五枚重ねて締道具にか

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

けて締めつけて葉面に筋をつく、鋏の裏面にて一々葉の筋をつくるもよし、併し締道具にかけたる葉形は程よく縮みて線筋を現はして甚だ眞物に擬す、而して軸は天然を用ふる方宜しけれども止むを得ず人造物を用ゐんとならば、草花なれば莖、花なれば枝の如く大低銅線を以て之を作る、則ち軸の心となるべき銅線を、其色合に應じたる寒冷紗又は紙を以て卷きつけて製するなり。

右の如く花、葉、軸共に製造し終らば、天然のものに適當の位置と形狀とに配置して組み立つべし、之を爲すには銅線の先端に花を着け銅線を卷きつゝ枝、葉、蕾（蕾の製作法は花を製すると多く異ならず、花片の曲法を加減して包まるやうにする迄と知るべし）を順々に括りつけ或は糊附すれば可なり（糊はひめ糊を用ゆるが宜し）花、枝、葉、蕾等の順序と位置は成るべく天然のものに髣髴たらしむを上作とすれども、八重咲花の組立は隨分複雜なるものなれば、心を用ゐて取かゝるべし、其代りには美事なる人造の花を得らるゝなり。

單衣仕立につき注意二三件

上總木綿の丈なしと言ひて、夏物の安物には往々丈の不足なるものあり買入るゝ時に注意すべし。

紺飛白の如き單衣には僞紺に藍液を被せて藍臭と藍色とを與へて正紺に摸擬し、本薩摩又は久留米絣と稱して素人を瞞着する行商等あり注意すべし。

僞紺と正紺とを識別するには其織物の端を親指と親指との爪を濕して強く揉み試み、其爪に色の移れば僞紺なり、併し近頃僞造は益々巧となりたれば其位の事にて識別すること困難なることあり、若し斯樣なる時には、其織物の端の糸を燃して殘灰は白色を止むるものは正藍紺にして然らざるものは僞紺と知るべし、かゝる面倒なることを爲んよりは確實なる呉服店に就くを

良策とす。

確實なる呉服店にても四ッ身着丈二丈と稱して賣るも、其實は一丈八尺五六寸に過ぎず、素より四ッ身に裁縫して不足はなきも、縫上を爲し置くに濶澤ならず、但し一丈八尺五寸にては二歳位の三ッ身一枚と同筒袖一枚とを製し得るなり。

飛白の如き單衣は成るべく丈を長く仕立置くべし、洗濯の後短縮するの恐あり。

縮の如きものは少しく短く裁縫し置くも宜し、洗濯の後長延するの恐ありと知るべし。

單衣は大人物と雖も縫上を爲し置き、裾掛（裾を裏に三枚に折る處）は短きを可とす、單衣は屢々其裾をすり破るものなれば、縫上を爲し置き裾掛を短かく爲し置く時は、裾廻りを縫ひ替ゆるに便利なり。

養蠶術（續）

前號には蠶種の事を記したれば今號は蠶兒の事情を記載すべし。

蠶兒の生理――は養蠶術に差したる關係なければワザと略す。

溫度――は蠶兒に大切なるものにして人間の衣服と同じ事なれば、充分其寒暖に心せさるべからず、溫度は大低天候、火力共に六十度以上の溫度によりて發生し、入梅の頃上簇するものなれば一晝夜を平均して六十五度以上七十度內外の溫熱最も蠶兒に適す、七十五度位にする養蠶家もあり、これ他なし蠶坐內は蠶の糞尿等の爲に濕氣あるものなれば、七十五度にしても七十度位の溫度と同樣且つ桑片を蠶坐に容るれば十度內外の溫度降るなり、又蠶坐內眠蠶の三分の一位見はれて其他の蠶兒も亦將に眠らんとする時は五度以內の溫度を

高め桑を少し多く給して眠を促かし成るべく眠を揃はしむるを肝要なりとす、若し又南風等の爲め天然の氣候激變して、温度非常に昇騰するに到らば、蠶室の全窓戸を開き空氣の新陳代謝を爲し、屋上に水を撒き室內は雜巾にて清潔に拭ひ若しくは桑枝を散らし、濡布を掛け或は水を容れたる桶等を置き、除沙（蠶下を掃除するをいふ）を怠らず且つ給桑の量を減じて度數を數々するの方法を執行すべし。

空氣――蠶兒の呼吸するは人間の呼吸する如し其鼻口よりせずして、脊部の十八氣門よりするものなれば、比較的に多量の空氣を要すること論なし、隨て炭酸氣を吐出すること甚し、されば炭酸氣は人間に害毒あるが如く、蠶兒にも甚だ危險のものなれば充分心を用ゐざるべからず、故に一時間若しくは二時間毎に一分若しくは二分間宛窓戸を開き新鮮なる空氣を入れて炭酸氣を驅逐せざるべからず。

休眠蠶齡――蠶兒の睡眠は蠶の一生中に只四回あり、然し其實は全く睡眠するにあらず、絶食して靜に休安するなり、此休安則ち休眠は蠶の發生より成繭に至るまで前後四回、則ち第一眠、第二眠、第三眠、第四眠なり、又發生より第一眠を爲す間を第一齡とし、次々を第二第三第四齡とし、第四齡終りて成繭期に至る間を第五齡とす、此第四回の休眠を稱して、第一眠を獅子の休、第二眠を鷹の休、第三眠を船の休、第四眠を庭の休といふ、第五眠を爲さんとするや、少しく糸を吐きて蠶座內の桑葉等に附着して之を腹足に搦め、首と半身を直立せしめて匠角を爲すに至り、これより鈍角となりて一晝夜を過ぐれば一直線となりて蠶座に附着す、これより蠶は自身の保護たる繭を作らんとす。

蛻皮――而して蠶兒は繭を作るに至るまで其休眠每に蛻皮を爲す、則ち四回の蛻皮を爲すなり、其蛻皮の有樣を注視して見れば中々面白きものなり、則ち第一番

に頭と第一體輪との接際に於ては舊皮横さまに破綻し、更に其眞中より縱に劃れて第一軀輪の半に至り夫より頭部の舊皮脫落して新皮を被りたる較々大なる頭之より露はれ、第一軀輪及び胸足之に次ぎ、已に胸足を蛻出せる後は、蠶は其六脚を蠶座に固着して數々身體を盛縮し、頻に匍匐の狀を爲し、次方に前進して遂に全く舊皮を脫するに至る、之れを蠶の蛻皮といふなり。

社交一斑

流行の栞

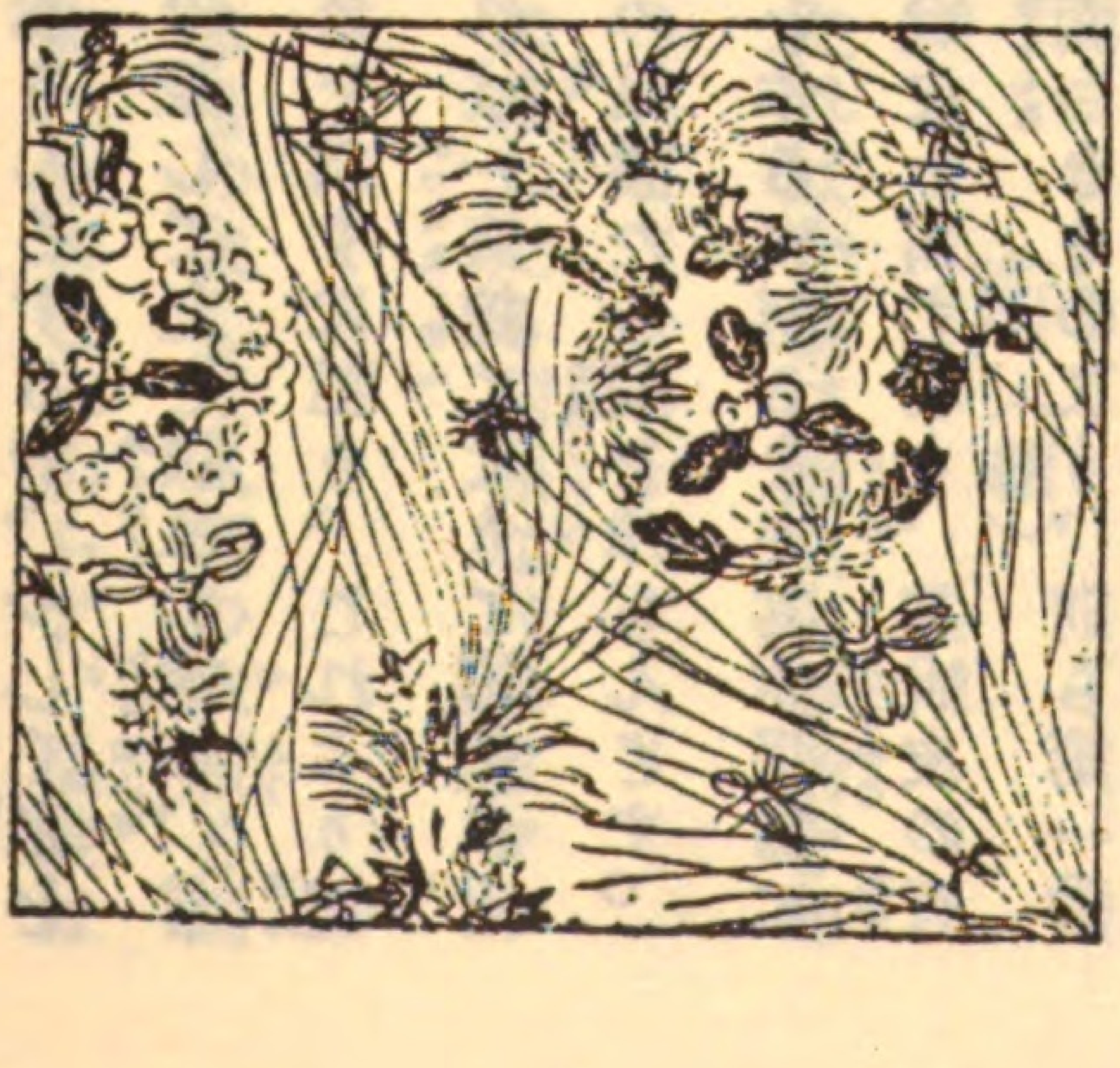
春夢

夏向女帶

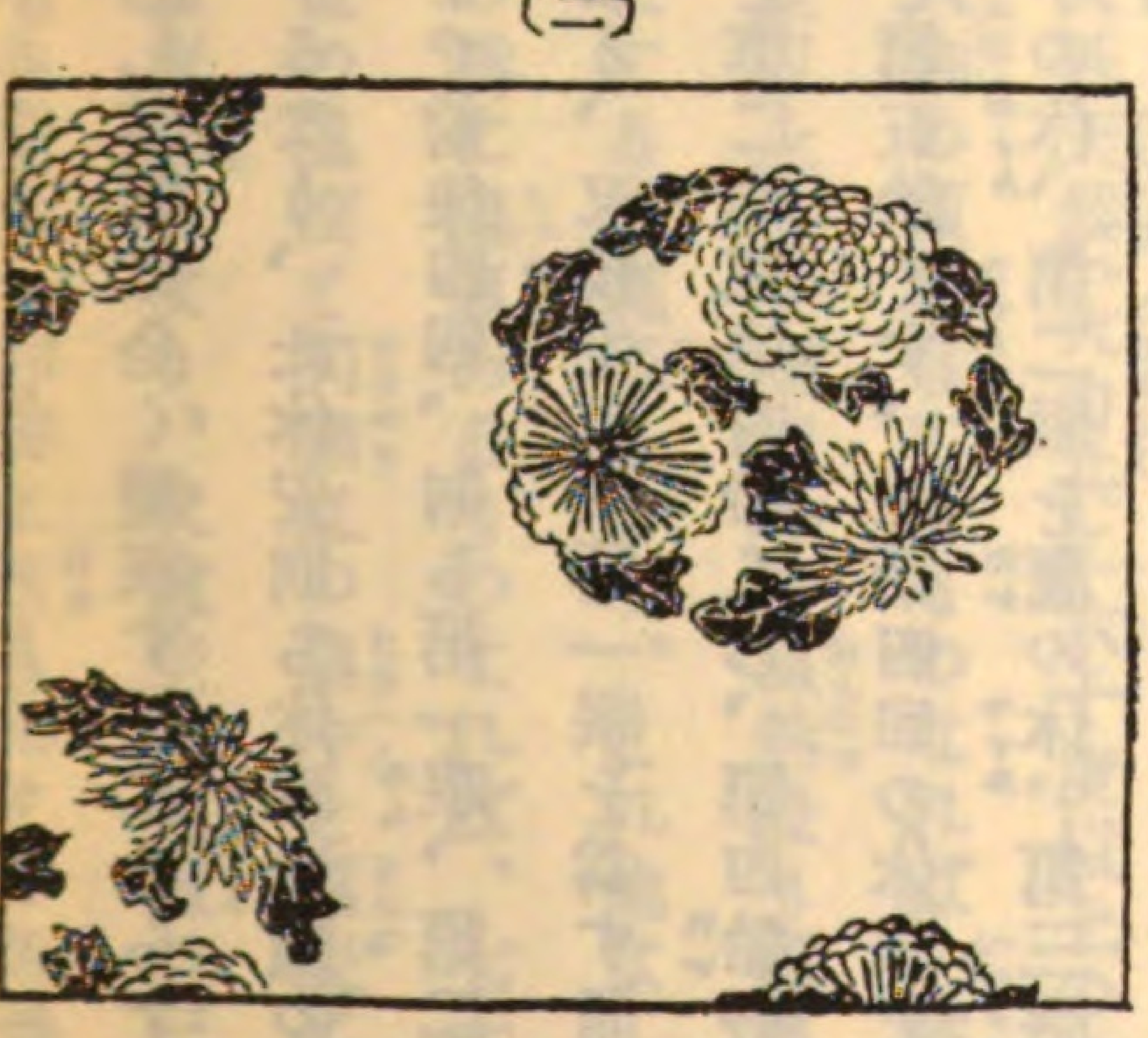
流行の最なるものは例の糸飾綴紗丸帶にして柄は悉く中摸樣十五六歲より二十四五歲迄の用品とす而して下圖にある如く摸樣の種類は扇地紙形、鶴、菊或は牡丹、紅葉等にして地色は濃鼠、白茶、黑地及御納戸とす但し紙幅に限りあれば最流行の一部を示せしのみ

（一）白茶地、楠王摸樣、色は中心枇杷は白茶にして葉に紫鼠、菊又は櫻は焦茶一巾入摸樣

（一）



（二）



（二）濃御納戸地、摸樣巴形菊、色は鶸、白茶、淡藤一巾丸摸樣

（三）白茶地淡浅黄と金の波摸樣上形は地紙摸樣は菖蒲、紫陽花、芍藥等

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

にして其色は實物に依ろ、一巾六摸樣

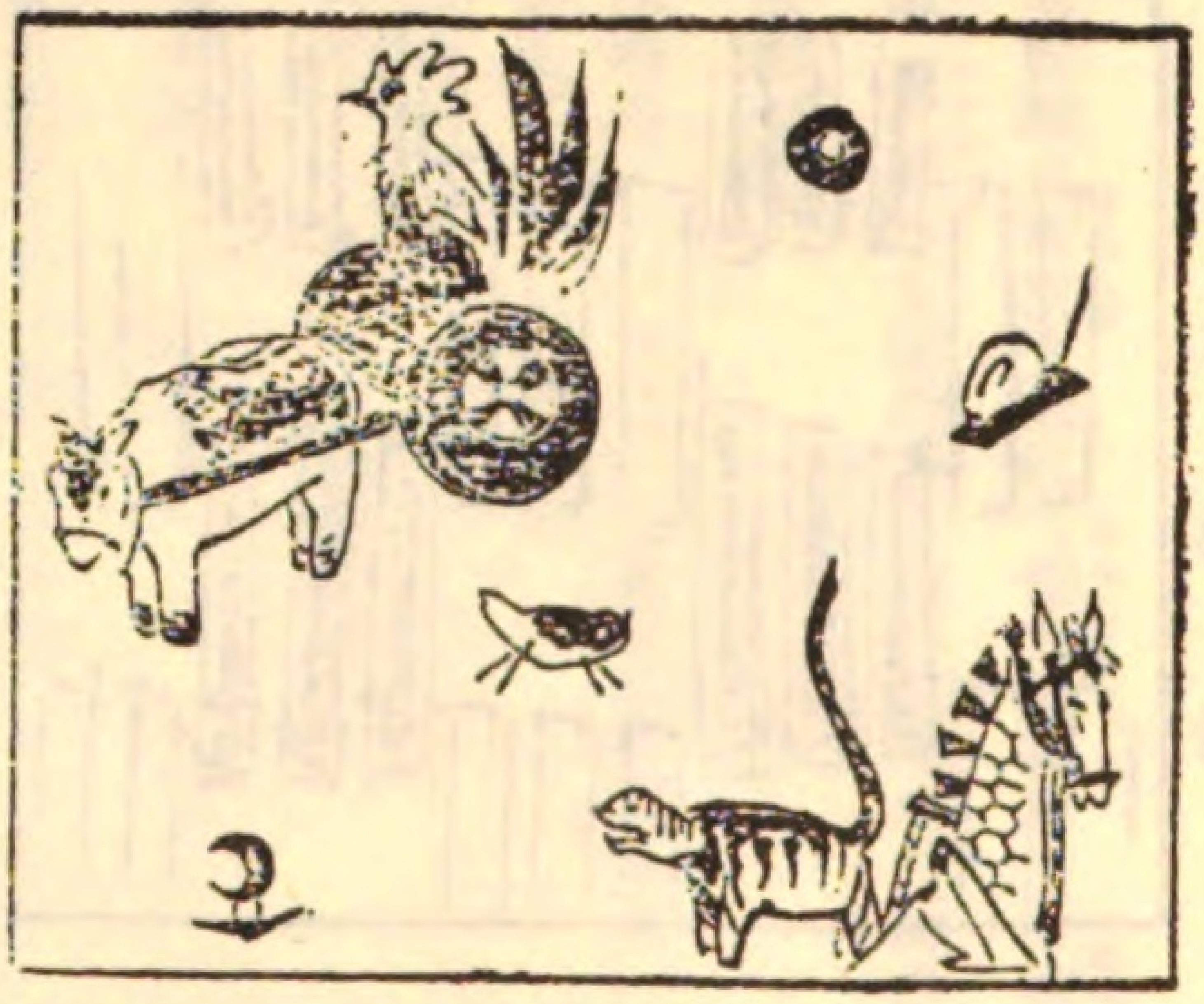
(三)



幽禪の單衣地

概して流行色合は紅掛鼠淡藤の二色に占領せられたろか如し他は淡鼠淡壁鼠の類とす摸樣は七八分菊にして其餘は紅葉或は牡丹の類なり

(一)



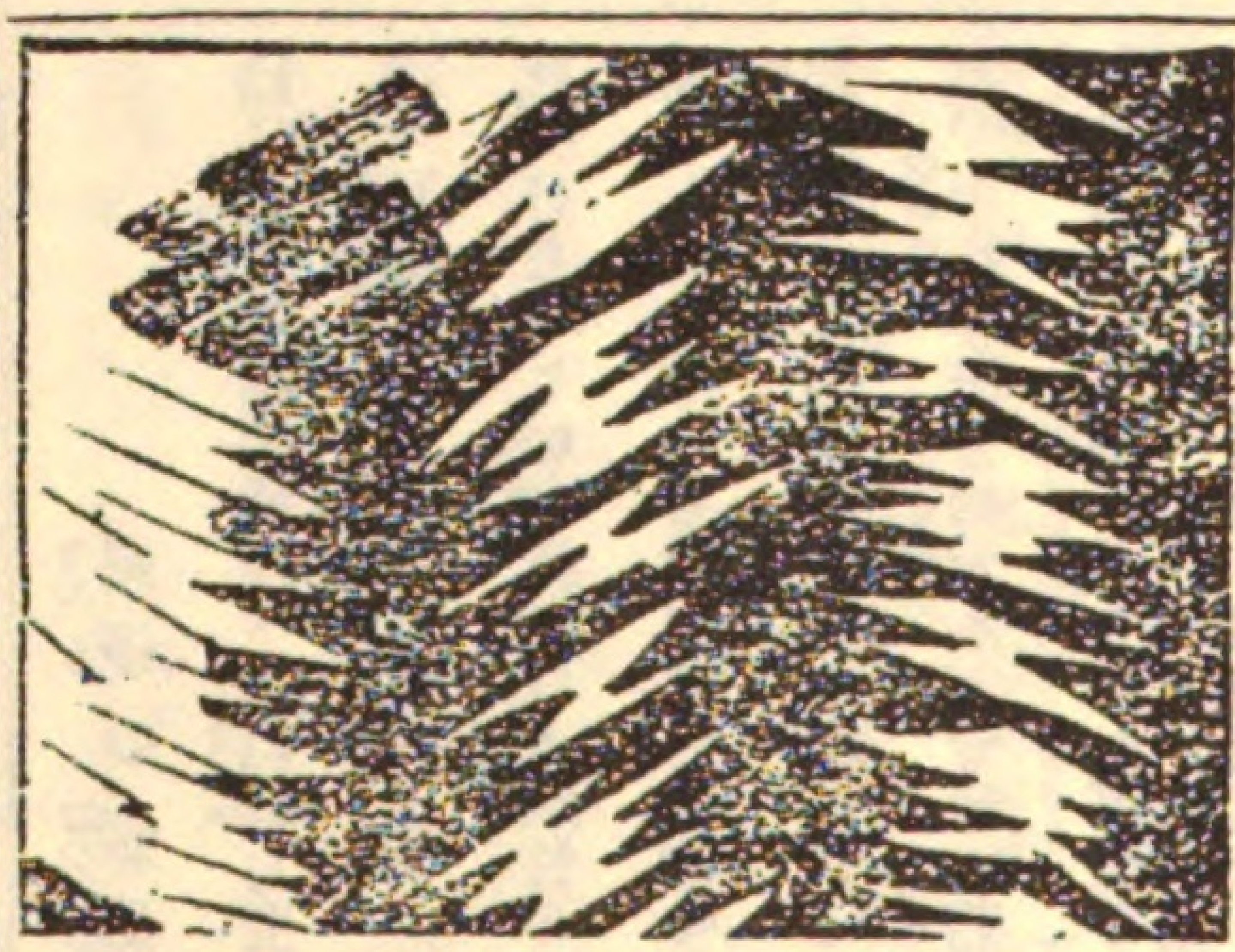
(一)櫻鼠地に閑鳥子の牛車、春駒に虎うさぎにはぢき猿の玩具摸樣

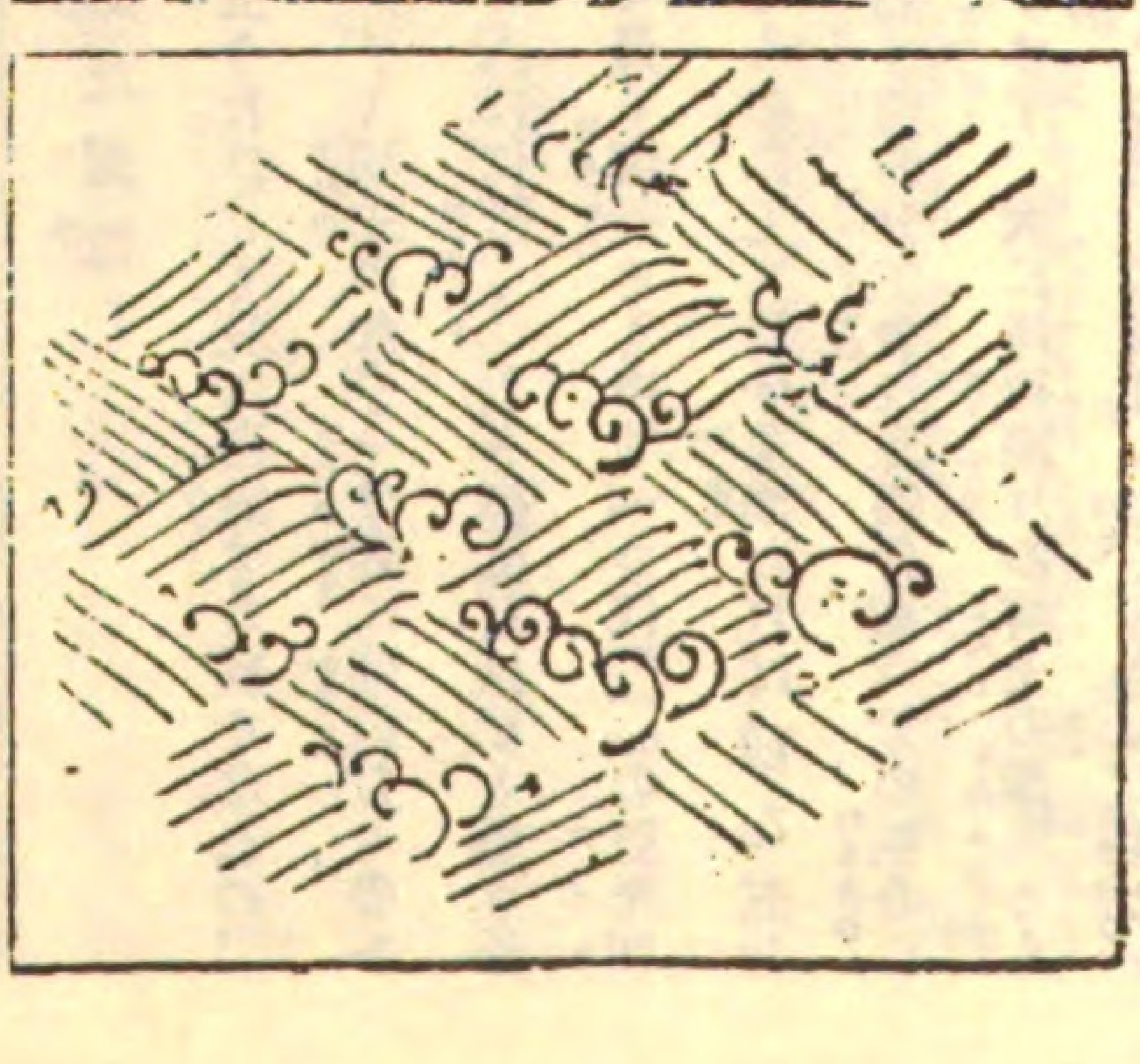
(二)淡藤地に櫻こ若葉の五三桐、古代鳳凰摸樣

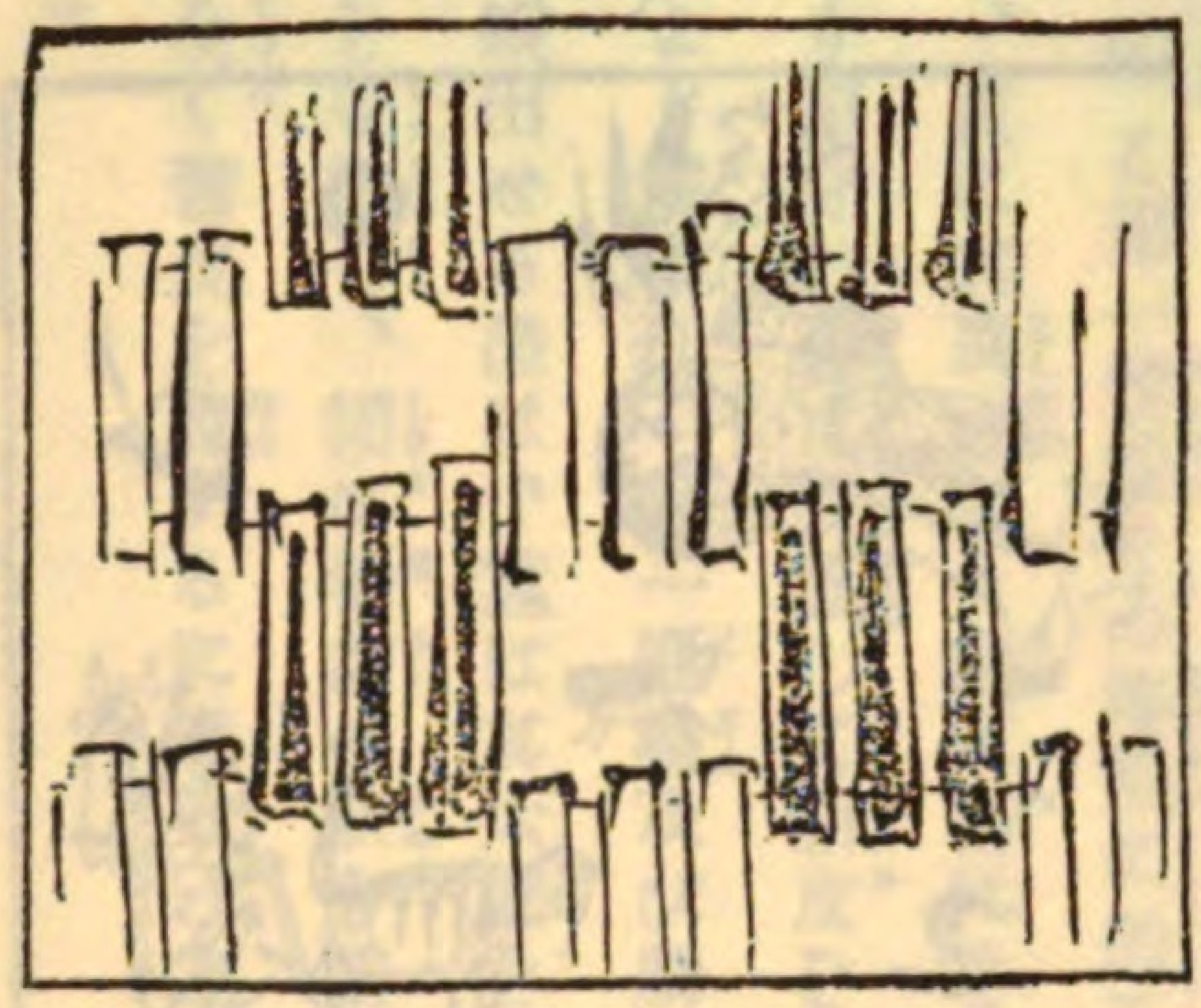
縮の浴衣地(女物)

(二)

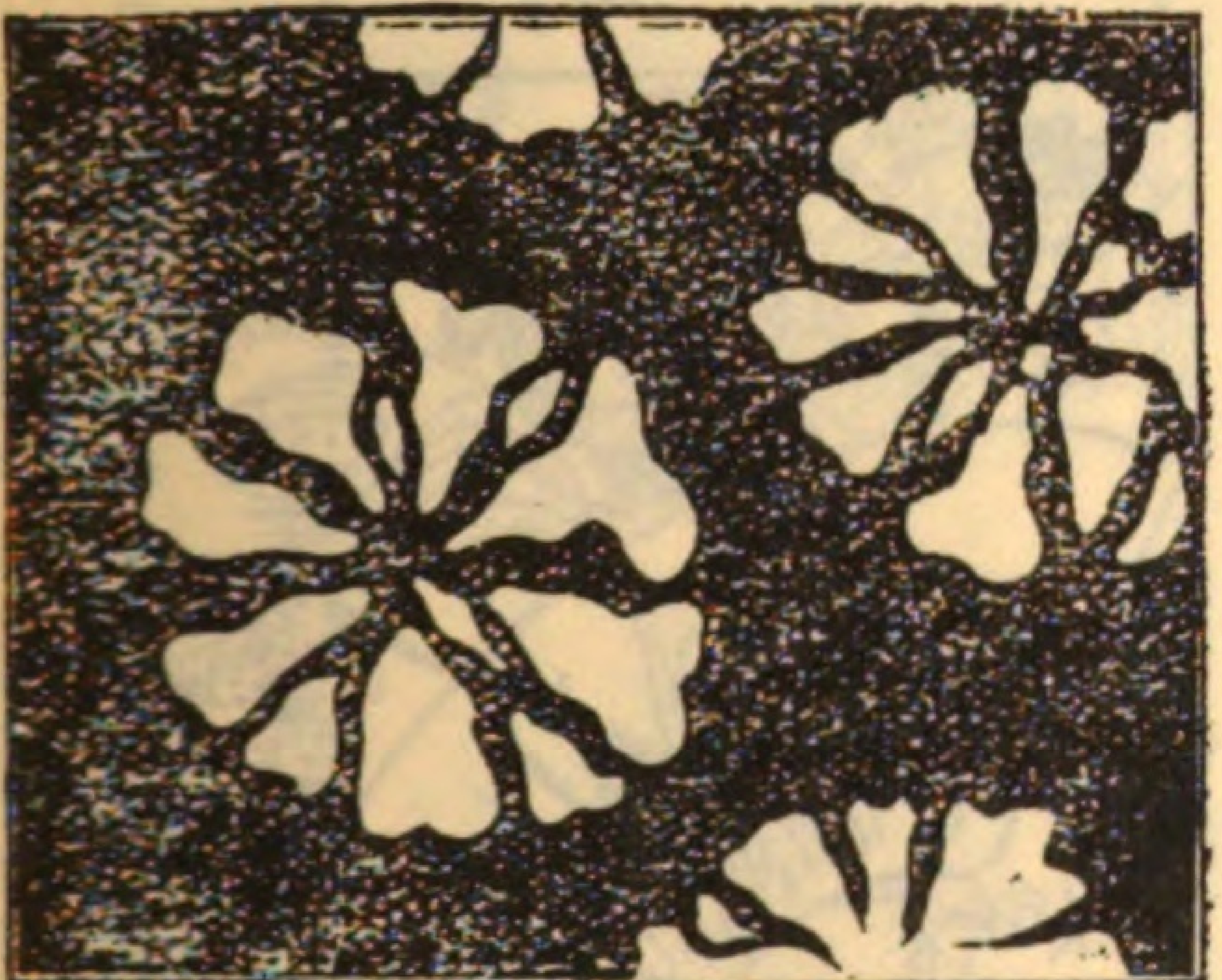








上に圖する所は本年の新形にして地色及摸樣の色は前號紙上に案內せし如く白地に紺の形、紺地に白ぬき形にして是又淡泊なるもの流行せり其流行の重なるものを擧くれば



男子の髮風及髭髯

巳に過日の國民新聞へも記載し置きたれども玆に再錄する事となしぬ、追々夏向となりたれば散髮はクル〳〵坊主の如き一分苅に苅込むものも見受けらるゝが一分苅は上氣性の人には輕々しき髮風なれども餘り品能きものにもあらず、されば昨今最も流行とも申すべきは(一)の亞米利加風なり(二)は其側面を示したるものにして目今夏季なれば前を五分程、中程を三分領元を二分程に苅り前の分工合は左四分右六分の割合にして領元まで割り通さぬを可なりとす、次に洋行歸りの紳士の髮風とも申すべきは(三)なる佛蘭西風なり、(四)は其側面にして此髮風は頂上を平に苅り立て殆んど正角の如き形を爲し前は三四分にして後頭部より領元に至るは地の透き通る位に短く苅り前は分けず苅り放し置くを流行の神髓を得たるものとす、髭髯の流行風は其人々の顏の長短恰好によりて其趣を異にす



れども大率丸顔の人は頤に髯を生し長顔の人は髯を剃り落し甚だ長形の人は兩頬に髯を貯ふ、而して鼻下の髭は一般の流行なるが其生し方は亞米利加風にては(一)の如く髭頭を捻るを好み(三)の如き佛蘭西風にてはピンと上方に刎れ上ぐるを喜び、之を鳳形と稱するなり、眉毛、鼻毛、耳毛は其まゝに放置して剃刀を當てず鼻の毛の外に顯はるゝるに至れば小鋏刀にてはさみ去り、顔のむく毛を去るには海綿を以て摩擦す髪及び髭には油類を用ゐざれども少しく香氣ある西洋髮附を附點するこそ最も流行と知るへし

有松絞り

尾張有松絞は品質丈夫にて變色せざるより販路大に廣り小笠原島及び清國廣東等へも輸出多き由にて今年は殊に好景氣なり今其流行柄と代價とを記せば

◎三浦絞	尺巾一等品三丈一尺もの	金二圓廿錢位
同上等	三丈もの	金一圓七十錢位
同中等	同	金一圓三十錢より四十錢
同並	二丈八尺もの	金一圓十錢
◎養老絞り	上等	金一圓六十錢
	中等	金一圓三十錢
	並	金一圓位
◎濃紺地すき	上等三丈もの	金一圓八十錢より二圓位迄
飛摸樣	中等	金一圓廿五錢より一圓五十錢
	並	金一圓より一圓十五錢
◎四ツ身立絞摸樣	上等	金一圓三十錢
花其他の摸樣付	並	金一圓廿五錢
◎三ツ身立	同前記の二割安と知る可し	

此外絞摸樣白三浦入は府下を初め横濱新潟地方に流行し白地無双絞り又は蓆織り其他生地白上り櫻の摸樣花摸樣等最も大流行にて賣口宜しと

夏季の盆栽

昨今夏季の諸盆栽中新芽美しきは檉柳及び杜松萌え出づる楓、馬醉木、姫虎杖の若葉、紅、白紫三種、香附子、玫瑰并金線邊巡めて愛らしき草藤、瑠璃鷲草、車輪花、金銀花、枝より大なる實を結びて誇顔なる枇杷、梅あり冷風吹送る石菖、水竹の類、其他盆石、紅、白炎り、櫸の柘榴、早咲は新粧を凝らして客待顔なるも可愛らし

虫のこゑ〱

本年は喞々たる虫の音色を聞くこと例年よりも早きこと十日餘目下市内各所の虫屋又は緣日に涼しき音を聞く如何なる虫は如何なる價によりて購ひ得らるゝか則ちきりぎりす(十三錢)轡虫(十錢)かんたん(同)草雲雀(同)大和鈴(同)黒雲雀(八錢)鐘たゝき(九錢)閻魔こうろぎ(五錢)河

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

鹿新子「本年生ぜしもの」（十四錢より三十錢迄）同圍ひ「已に昨年鳴きたる確なるもの」（五十錢より三圓迄）螢（一錢に付七八疋）

青すだれ

本年は原料高價にて昨年の昨今に比し凡五分方の騰貴なりとこれには餘り流行もなけれども其直段を擧くれば

一分割（一間四方）金六十二錢◎二分半割（一間四方）金五十三錢◎大坂割（一間四方）金四十五錢但身皮交を云ふ◎本編障子（下組）金一圓三十錢◎本編三六金三十五錢◎上六通り三六金二十五錢◎並六通り三六金十五錢◎五通り三六金十二錢◎一間巾縄簾金四十五錢◎糙棕櫚葭簀（九尺二間）金五十六錢◎同（八尺二間）金四十六錢◎同（七尺二間）金三十七錢◎同（六尺二間）金二十七錢◎葭天井金二十二錢

鯱牙製の前挿

前號に記せしが如く夏向となれば髮具も象牙の如き白色なるものや、丁貝の如き淡泊なるものを尙ふ、此頃流行する鯱牙製の前挿は、其白色なること象牙と相結抗し淡泊なる事丁具の上にあり、俗語に曰く鯱は魚類中の最强なるものにして此魚の牙にかゝらば鯨鯢と雖も辟易遁走すと、此前挿は果して鯱に劣らぬ倔强のものなるかは知らず美麗なる團扇形の製作品に、月に杜鵑、花菖蒲、夏草、小菊等を刻める風流、以て夏向の髮具とするに足る、價六七十錢



日用品物價（六月六日）

◎白米小賣相場（一圓に付）　一等白米八升四合●二等白米八升七合●三等白米九升●四等白米九升五合●五等白米九升七合

◎鹽　赤穗三俵四分●大鹽三俵五分●本齋五俵四分五厘●新齋六俵四分五厘●古積上二俵八分●同中三分

◎雜穀　室蘭小豆一斗二升二合●中手小豆一斗四升五合●川越本場金時九升五合●銚子隱元八升三合●新庄内平豆一斗四升二合●川越白さ一斗一升●本場平豆一斗六升●北海道豌豆一斗六升五合●鶉隱元一斗三升七合●吉原大豆一斗七升五合

◎砂糖　稀車三十五匁六分●同次三十五匁二分●台安二十匁三分ゟ十八匁二分●呂宗二十匁ゟ十八匁●初雪三十匁ゟ廿九匁●天光二十八匁五分ゟ八匁●無類黒十九匁◎同次十八匁五分

雜録

遺珠顆々

○榮譽　セーキスピール

榮譽は水上の環波の如し次第に廣まり行きて終には無に歸するなり

○壓制と不貞　セントヒエール

男子の壓制する國にては婦人は常に不貞なり暴は常に詐を生ず

○正直　ヴオルテール

吾れ若し正直の人たらずんば吾は終に滿足する能ざる可し

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

日本現時の生産力―(重なる物産)

《統計集誌、吳文聰》

品名	生産額	總價額	重ナル生産地	輸出高	輸出價額	輸出先
米	四一三七、八四七四石	二、八三八五、六三三二円	全國一般	五一、二二八〇石	四一六、二四五一円	英、米、獨、香港、佛、濠洲
麥	一五八九、三一二九石	五八〇〇、九九二一	全國一般	五九二石	一九一三	—
茶	七〇九、六三九八貫	九六一、五六一九	駿州、遠州、勢州、山城、濃州、江州等	六〇〇、二九一二斤	七五二、五三一五	米、英領アメリカ、英
生絲	一一一、六四二二貫	三八四六、六三三〇	信濃、上野、岩代、武藏、甲斐、近江、飛驒、羽前、陸前等	八六、五〇九七斤	三六二六、九七四三	米、佛、(大ニ下リテ)英
熨斗絲	一九、〇四〇四貫	一一一、一七二二	信濃、上野、岩代、武藏、甲斐、近江、飛驒、羽前、陸前等	三三、五一四四貫	一八九、六七七一	佛、伊、墺、英
生銅	三〇一九、二四四七斤	五〇三、〇〇六二	下野、伊豫、羽後、備前、備中、加賀、越後、石見、日向	一五八六、一一九八斤	二四九、九七四二	香港、支那、英
石炭	二六〇、八二八四噸	一〇〇四、一八九三	肥前、豐前、豐後、筑前、筑後、北見	六四、八四二二噸	二二〇、七六一〇	香港、支那
鯣	一五一、七九二四貫	一〇〇、八〇八七	北海道、隱岐、伊豫、肥前、駿河、陸中、越後、伊豆	一一九、六八〇六貫	九八、〇三〇七	香港、支那
昆布	五八五、七六五四貫	四三、三六〇八	北海道	五八七、四一二八貫	八一、八八四一	香港、支那
鮑	一四、八〇五八貫	二四、〇八一八	北海道、三陸、下總、伊豫、豐後、肥前等	一七、六二五五貫	三八、一六九四	香港、支那
燐寸(マッチ)	一二八四、一〇二一グロス	二五七、二九八六	神戸、大阪、東京	九二四、二〇三五	二二〇、二〇四一	香港、支那
絹手巾	五七、五六五七打	一二、四一〇〇	東京、神奈川、愛知、岐阜、神戸、岡山	一四七、〇七八三打	三四九、四四一六	米、英
羽二重	—	—	越前、加賀、上野、下野、河內、尾張、美濃	二四、〇二〇〇反	四〇三、〇四七六	(組布類)佛、米
織物類	五二一九、五八九二圓	四五一九、三九一二	上野、下野、甲斐、近江、武藏、丹後、京都	—	—	—
磁器陶器	—	二一八、四二三四	肥前、尾張、美濃	—	一四八、〇四一一	米、英、香港、(下リテ)佛
漆器	—	—	紀伊、加賀、東京、大阪、京都	—	五二、八〇七五	英、獨、香港、(下リテ)佛
樟腦	—	—	九州、四國、紀伊、伊豆、駿河、安房、上總(再製)大阪、神戸、横濱	三〇六、四〇〇五斤	一二七、四七五二	香港、米、英、獨
木蠟	—	—	筑前、肥前、伊豫	二四四、九七〇一斤	二八、五五六六	香港、米、佛
清酒	三〇六、八〇一八石	四三六八、八五七六	攝津、信濃、筑前	—	—	—
肥料(鯡〆粕)	二七四三、一五九八貫	三九九、九二九八	北海道	—	—	—

《右は明治廿五年度若くは廿四年度廿三年度の額なり》

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

通俗の哲學者

司馬のや

智惡藏と云ふ老人は或る小村に生れ、今八十の坂を越したがまだ隣村より先きには旅行した事はありませんが、東京や大坂のやうな大都會に居る人々よりは深く世情に通曉し、常に好んで自分の經驗して集めた小歷史を話しました。而して其話は詩人的の趣味には乏しいもの丶實際の生活に應用すべき眞味に富んで、特に面白きは各二題づ丶相聯關しておることです。

曾て甲吉といふ人が智惡藏の許に到て、其利口なるを歎賞ました。

何、此智惠藏が利口ですと?

智惠藏さん、世間の人は皆左樣云ひますよ。どうか私も利口になり度ものだ。

お前利口になり度? 夫れは譯のない話だ。まあ馬鹿が何をするか能く注意てごらんよ。

馬鹿のするとかね。

左樣さ——而して馬鹿より異なッた事をすればよいさ。

譬へはまあ何樣ことです。

一例を云ひますと、甲吉さん、私が若ひ時老年の數學先生があつたが、其人は諸處を徘徊もの丶少しも他人と談話をするとはなく、いつも獨で何か口をもぐもぐ動す許りで、又他人の顏を見ると杯は幾んどなく、何時でも氣が晴れたと見へて、獨語をいふて居たよ。

どうだ世間では此人を何と評だろう?

そうさね——沈默家かね。

夫れよりいつそ馬鹿と云ふだろうよ。兎に角私は此先生の樣ではならぬと思ふのさ。己を省みた許ではいけない。お前さんも氣を大きく持つて遠慮せずに

他人の顔を御覽よ。又くど〳〵獨言よりか他人と面白く話しなさい。どう思ふね甲吉さん私の言ふ事は間違つて居ないだらうがね？

實に左樣です。

然し私は良否がまだ判然しないよ。何故なれば他に踊の師匠があつたが、此人は誰でもかまわずに顔を覗込み、耳を持つて居る者さへ見ればべちやくちやと饒舌散らした。甲吉さん——世間では此人を何と評するだらうね？

氣輕な長舌な人とでも云ふか知らん。

矢張馬鹿と評するよ。處で私は余程奇天烈なものと考へたのさ。夫なら利口と云はるゝには何樣すれば良ひのか？數學先生のやうでもなく、と云つて又踊の師匠の丸出しでなく、先づ遠慮なく人々の顔を覗込み、夫れから注意に注意を加えて己を省み、又師匠の如くに人々と大聲で談話をしたり、而して先生の如く靜に自分で自分と談話したりすべきのさ。甲吉さん私は何時でも其通りにした——即ち是が私の大秘密さね。

又或時利兵衛と云ふ若い商人が來て、其不幸に陷りたとを非常に嘆きましたが、智惠藏は徐ろに口を開いて、飛んだ事だつたねゑ、利兵衛さん。幸福搜しにでも御出懸なさいな！

それは私も長ひ間逐つかけ廻りましたが駄目です。何時でも一つの不幸がすんだと思へば又御代りが襲て來ますから私はもう明らめて、今後は手を膝の上にちやんと置て何事にも手出しせずに家に許り引込んで居る積りです。

夫れは惡ひ。それは惡ひ。お前さんは逐かけて御搜しなさい——だが顔を何樣して置くか能く注意すべきとだね。

何です私が顔を何樣して置くつて？

左樣。お前さんの顏――說明しましやう――、私の隣人が家を建築た時、當り近所は材木石なぞが積んであつて通り切れぬ程でした。之を請負た棟梁は未だ至て若き人で、常に腕をぶら〳〵垂らして彼處此處と駈け廻り、鼻と雲と稍々平行する樣にして居つたが、或日蹉跌で脚を折り今でも跛足だ。利兵衛さん私の云ふ事は分つたかね。

古諺の通りに鼻を余り高くするなと云ふのでしやう。

分つたね。だが余り低くしても惡ひよ。何故なれば其後暫くして詩人が來たが、此人は句を考へて居るか又は他に何か心配事でもあると見へて、徐ろに步行て恰ど地中へでも入らうとするやうに下の方ばかり見詰めて來ましたが、突然縛住てありた繩が切れたと見へて材木が前へドーンと落ちた。先生は可愛そうに正氣を失つて病氣となり、五六日間も苦ひ藥を飲んだよ。利兵衛さん私が顏を何處に置くかと云つた事が分りましたろう。

はあ、此樣に丁度中央にでしやうねえ。

左樣です。大膽に雲の方でもなく、又臆病に地中を覗込む樣でもなく、靜寂に上下左右に眼を投る時は此世界を容易に渡り行く事が出來、又不幸に遭遇しても早くより之に應ずる樣用意する事が出來るゆへ安心して居られました。

又或時投機者の玉子なる小山と云ふ人が來て、金を借らうとして說て云ふに

私だつて預て是丈けでは大事業は出來ぬと覺悟をして居ますが、手がむず〳〵して堪へられませんから、是非一つ乘るか反るか運試しをやる積りですから、出して頂戴なねえ。

お前さんの入用と云ふ金はどの位です？

實に余り少許で云ひ出し惡う御座いますが、凡そ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

百圓ほど。
其丈なれば御安ひ御用。エヽ御持ちなさい。加之高貴な品を一つ進上しますから是で富貴に御なりなさい。
智恵藏さん何を下さるのです？
なあに一つの世間話さ。私の若年の時隣家に酒屋がありましたが其主人は余程磊落の性質にて常に何事にも唯一の熟字を用ひたよ。
へえ夫れは何と云ふのです？
他人が如何です酒屋さん近頃は利益がありますか？と云ふと、はあ眞の少許凡そ五十圓ばかりさ。何の益にもなりませんと答へ、又今度の破産一件ではお前さんも損をなさいましたろうと云へば、はあ御話しする程でもなく僅々三百圓ばかりと答へて、常に惟一の熟字を以て圓滑に此世に處して居ましたが、小山さんお前は幾何入用と御云ひでしたねえ？
私ですか？百圓願度のです。
左樣でしたね。私は遂ひ度忘をした——私の他の隣人は粉屋でしたが、此人も惟一の熟字を以て大きな土藏造りの家を建てました——お前さんは何樣思ひます？
面白ですなあ何樣してね？
粉屋さん何の位利益がありました？と問ふと、大金〳〵殆んど百圓と答へました。が腹の中では虫めが苦笑ひをして居るのがちやあんと見へ抜ひて居ました。又何故にぶつ〳〵怒て御出でゝすか？と問へば、二十圓許の大金を失つたと答へたのさ。此人は初めは眞の小商人でしたが今では土藏造りの家に住居して紳士株になつて居るが、小山さん、お前さんは孰れの熟字が御氣に召すかね？
勿論粉屋さんの方ですね。
然し小山さん、私は粉屋の樣でも惡ひと思ふよ。何

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

故なれば貧乏人へ施す時や又は御上へ税を納むる時なぞは酒屋の云ふ通りに云ふが適當だと考へるよ。底で私は此兩様の熟字を覺へたから能く〳〵之を玩味して時と場合とに依つて酒屋の通り又粉屋のやうにも話しますよ。

誓て私は粉屋さんに賛成を表します。土藏造の家は大好きですから。底でお前さんの御依賴は――

大金〳〵、智惠藏さん百圓何卒貸して下さいな！

お前さん、分りましたね。友達から金を借りる時は粉屋の云ふ通りに云ひ、友達の急を救ふには酒屋の聲色を使ふが必要ですよ。

墓畔の零露

（口繪の繪解）

高山彦九郎は寛政三奇人の一人として勤王家の唱首たることゝ人の知る所。

彼は母に事へて至孝、其沒するや、墓側に廬するもの三年なりき。春風の夜、秋雨の宵、涙は墓畔の草を霑ほしゝとなり。

論説

家庭の破裂

一片の投書來て編輯局の机上に在り、之を披けば則ち言ふ。

結婚

在淀　荷月生

浮世のつとめとして快樂の結婚、嫁もらひし時の心忘るなの諺、誰かろか知られど柿の千代の句、完全の發達を遂げ圓滿の目的を達せん道とは家庭子に聞けり、われこれを快樂の目的とせしならねど過ちて恐ろしきに陷りしを今懺悔せんにつ

われは十四の秋に父を失ひてそれよりは母の手一つに人となりぬ。家庭は豊なりしもおのれに朽ちて、そこゝ流浪の末は、幾年國を出でゝ知らぬ風土に、今も其日を月いくらの金に過すめり。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つく〴〵昔を悔れば、過しは追はれど、未來の定かならず。これより事に志さんも母いたく老ぬれば不時の離にひかれんを憂ふ。さればこゝに助けを求め二つを分たん願ひ浮びて色ならぬ妻をと思ひ起せり。されど難きは共稼ぎせんものならでは吾望にあはず。妻をも養ひ母にもみつがんはかなはねば、せめては普通の力備へて一個のよすぎならんものとの捜索なれば、金のわらぢはきて探す人より見當らぬも實にや。

されど縁ありて一人を得たれば、吾思ひ打明けていふに、彼も同意せり。若し母の病ひなどあらん折はわれに代りて看護を給へ、されば後ろに憂ひなければわれは忍耐に克己に勉勵せんものと。此事諧ひて許婚成立つ。彼はわれよりも長けて醜ければ友は縁の永からざらんとて諫めり。されど心に許す戀の宗教に在るの彼は、他心のあるべきや、彼れとならば、何のわれは目的ありてのわざなればとて、露うけざりし。元より二年三年は結婚の式はあげじ、今色にかられての許婚ならずと互に約せしが、人はこれを憂ひて遂にせよと勸むる人多く、われは年若ければまた心にうつろひて今の彼をも棄つることのあらんなど浮氣案じて、とやかくとの人の親切も一年ばかりは打過しに、二人同所に勤むべきの事起りて式行はずば共に行き難ければとて、某月某日これを公にせり。

彼れは久しく女學校に在りて家政の學も割烹の法も其間に得しと自ら言へり。されど疊水練は何の功なく、隣の女のときしらげし米を二つ三つ音させて米とぎの法なりとや、飯炊ぎてふき溢るゝを蒸取らずばといふほど。口のみ贅澤に漬菜にも鰹節かけん計り。さて何事にも物うく坐敷一つ片附けんとはせず。たゞ何の躾にやおのが衣類の洗ひすゝぎのみ力を入る。

「添ふて見る日はまた出る遠慮、胸に苦勞の水加減」とは女のたしなみよけれど、今の學校育ちは何も知つたふりに困り、さて用にはたゝず。火鉢の火も直に消ゐてこれも經濟の學びにや。年長けたるものゝ嫉妬深きとは過たず、義理すてんにもおのれよかれといふ。

かくて新婚の其月よりおもしろからず。彼はもと學校に育ち歐西的慣習にのみ馴るれば、たゞ男女同權の家風に泥み、夫唱婦隨なかゝる此室家に行はれず、共稼ぎと思ひてわれ勞を分てば彼は増長す。牝雞の晨こゝに不滿の情を起し、上を望む心に離去の手段にのみ走れり。されば不幸は一家に滿ちて惡魔に襲はれ果てゝ迎へん月日甲斐なく、子女もあらん曉思へばいよ〳〵恐ろしく、其翌年には破鏡の談。

男女同權は上流社會などでは行はれず。夫も妻も朝より鋤鍬かつぎし夕に事を爭へば食事の仕度は誰がすべき。夕顔棚の團欒とても望むべからず。二人働き合ふはよけれど己れのみ強く勞をも分たんと心走る。妻はたゞ婢僕の上に留守居を務めの室家ならでは百馬廐ならねどいつか男は弱し。別けて學問の功は反比してこゝに表はる。容よきものは色に敗れ、學あるものは力に失ふ。われは目的とする所ありて教育のあらんものをと望みとて誤れり。男子の獨立心なきにはよれど、貞淑は求むべからずとて、世人の女子には學問の不用といふこと無理とも思はず。今も聞く、東洋の慣習其弊は知らねど妻として今更にゆかし。

新婚によりて進取の心を止むるとの教を聞けど、われはそれとも望まんか、何の目的は向ふに外れ、此一二年はさん〴〵に日を消して、老母には却て心痛の種造りぬ。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

初めは世辭ならぬ祝ひきゝて猶も良婿を得しと羨まれしも、今は我身の累となりぬ。釣合はぬこそ不縁の基かは知らねど、身より招きて悲慘の裡に悔多し。

愈々離婚の曉となれば、妻なるものもつらしとてか手紙のはしに、

「凡て何事も改め可申覺悟に候。實は昨年暮頃迄は色々と未だ獨身の時の考へ殘り居り、とやかく偏執の思に陷り、其了簡と入の妻となりての考へ確に心にわからざりし」云々

「在京中四五年間は、中等以上即ち……等の家風のみ見習ひ中等以下の家風を知らねば、何事にも不自由を感じて、知らず〳〵不滿を生じ候事に候」

年ははや廿七も數へられ、未だ妻たるものゝ考へ慥かならざりしと、一家の觀念もなく結婚せしとは、寄宿舍の生活に馴れ女學校の机學問のみにてはさもあれ。

今となりておのれより悔ひ離婚はつらしと悟らん。されど覆水は盆にかへらず。

嗚呼、是れ何等の大不祥ぞ、何等の大恨事ぞ。吾人は之を聞て千感萬慨の坐ろに胸に滿つるを覺ふるなり。

若し夫れ海面の破裂は恐るべきは則ち恐るへきも本是れ波濤の躍るに過ぎず。山嶽の破裂は駭くべきは則ち駭くべきも本是れ地球表皮の變形に過ぎず。唯り家庭の破裂に至ては、事靈界の巨變に渉り、縱令ひ其事の如何にかすかなるさゝやきに因て宣告せらるゝも、之が神の鼓膜を撲つことは、啻に風波の叫のみにはあらざらん、噴火の響のみにはあらざらん。情界の大事變これに過ぐるものあらんや。人生の大恨事これに過ぐるものあらんや。而して此の大恨事大事變が現に我邦に起るもの歲々幾百千回か多し。

卑しき民人の間に於て起るのみならず、無學無識の人の間に於て起るのみならず、紳士貴女の間にも起り、新學問をなし新教育を受けたる者の間にも起る。今斯に記する所の者の如き實に其一にあらずんばあらず。」

其書を以て之を推すに、此の彼女は嘗て學校にありて貧しからざる敎育を受けたるものゝ如し。而してまたたしかに宗敎を信じ神を信じ泰西的慣習に馴れたる婦人なるが如し。縱令ひ斯書を投じたりし彼は彼女を其一たび終生の侶伴と契りしに係らずして惡しざまに言ひなしたりしとはいへ、これのみを以てしては、彼女

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

が一個の婦人としてよく良妻たる能はざるべしとは信せられざるに似たり。況や與に共稼の約をなして此の良緣を結びたるをや。宜しく遽に破鏡にいたるべからざるが如く然るなり。

而して此の彼も亦少なからざる教育を受け、教育の資によりて人の前にも立ちつゝあるかと思はるゝ人なるに。

此くの如き彼等の間に成りし婚嫁にして、遂に斯くも其終を全ふする能はずとは、蓋し其故なきにあらざるべし。顧ふに彼等は新舊社會過渡の時代に生ずべき二個の衝突に由て其幸福を犠牲にせられたるものには非るか――かの新舊理想の衝突に由て、かの理想と現實との衝突に由て。

疑ひもなく彼女は泰西的夫妻對立の新家庭を理想したるなるべし。疑もなく彼は老たる母を養ふべく適せる日本的の舊家庭を理想したるなるべし。疑もなく彼女は其學びたる學問の活用すべき中以上の家庭を理想したるなるべし。疑もなく彼の彼女を待ちたる家庭は彼女が學びたる學問を活用すべきよりは其學問を要するに至らざる家庭なりしなるべし。

斯くして彼女は先づ其理想と現實との衝突することに由て失望し、苦悶し、而して其新に作りたる家庭に向ての謀叛心は彼女よりして第一に發せられたるなるべく、かてゝ加へて彼が舊理想と彼女の新理想と相衝突して、遂に彼等が間の愛のきづなを寸々に引きちぎりたるものと思はる。

彼女が新家庭的理想を以て舊家庭に投じたるは誤りなるべし。否、彼女は舊家庭たる現實の家庭を新家庭なりと誤解したるならん。然らされば之を改革せんとしして力及ばざりしならん。而して彼は必らずしも新家庭の組織に反對する者にあらざりしなるべしと雖も、其老母を奉養すべき舊組織は遽に彼女の新意を容るに

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

便ならざりしならんか。彼は餘りに多く其勞を分たんとしたりしならん。彼女は餘りに少なくも希望を達したりしならん。之を要するにこれ新舊家庭の相衝突したる一顯象のみ。

嗚呼、社會は依然たる舊家庭に因て立てるに、學校は純然たる新家庭を作らしめんとす。若し更に理想と現實との調和を示授するにあらずんば、此の如き新舊家庭の衝突は到る處に起らさるを得ざるべし。新家庭舊家庭に打勝つか。舊家庭新家庭に打勝つか。力均して破裂すべきか。今の女學生を敎ふるものこゝに意を致さずして可ならんや。

記者曰く、君子は交絕て惡聲を出さずといへり、況や其第二の我として一たび其終生を契りたりしものをや。吾人は男兒として曩日の妻を非難したる荷月生を取ず。特に論じて女子敎育家の參照に資すること云爾。

時事一斑

上奏

國民的大同盟の意見たりし硬論者の現内閣彈劾の上奏案は一旦否決せられしも、自由黨提出の手やはらかなる上奏案を修正することに因て其精神復活したりしもの、遂に上奏せられたり。而して土方宮内大臣は勅意を傳へて

衆議院の上奏は御採用に相成らず。
上奏に對せられては別段書面を以て御勅答あらせられず。

と云ひ、遂に其希望は御採用あらせられざりき。時に六月第三日。

衆議院解散

上奏に對する勅意の衆議院に傳へらるゝや、尋て詔勅あり、衆議院は又々解散せられぬ。

朕帝國憲法第七條に據り衆議院の解散を命す。

三總撰擧、三解散

議會初めて開かれてより三總撰擧、三解散あり、第四總撰擧亦執行せられんとす。其間第一撰擧によりて成れる衆議院、第一議會百日第二議會三十一日合せて百三十一日。第二總撰擧によりて成れる衆議院、第三議會四十二日第四議會九十三日第五議會三十四日合せて百六十九日。第三總撰擧によりて成れる第六議會十九日。通算して三百十九日なり。

國民的大同盟の決心

衆議院解散せらるゝや、國民的大同盟を代表する貴族院議員及前衆議院議員は、即夜白票懇親會を催したり。

全國同盟新聞記者は四日の夜に會したり。

全國同志懇親會は六日を以て開かれたり。

而して皆第七議會に立て爲すあらしむべき準備として責任内閣自主的外政の實行を決心したるものなり。

高麗半島風雲急なり

高麗半島風雲急なり。

朝鮮に東學黨といへる學黨ありて嘗て一たび反亂せしが、五月上旬頃より又もや半島の南方に起り、鄭哥といへるを大將として已に國都京城に迫りたりと傳ふ。

是に於て淸國政府は一萬の兵を出さんとすといへば、我邦にても定めて之に處する所あるなるべし。

折も折とて我國民が東方の强梁人種たりし豊公征韓の昔も坐ろに憶ひ出さるゝなり。或人の嘗て豊公の征韓を詠じたる一首あり、こゝに揭げて一笑に資すべし。

征韓行

手に唾していざ四百州を擧げなん。
鞭を揮つて直ちに中原の天を指す。
山河垠わらず、分取するに好し。
髯奴身長し、いろはを敎へん。
艨艟天の若く、兵雲の若し。

とう〱と釜山の浦に寄する波。
火は揚る、濱邊〱の旗の影。
雲は多し、木の間〱の十萬騎。
振り翳す刄は冴えて膽寒し。
天を劈く意氣北斗を呑み、
敵を呼ふといき山河を吸ふ。
風は落つ、蔚山城の雪の朝。
雨は飛ぶ、碧蹄館の夕まぐれ。
幾月日鎧の袖を片敷きて、
假寢の枕に旅雁の聲近し。
武士の夢は何地を繞るらん。
空低れて野邊に横ふ天の河、
ふりさけ見れば、氣は張弓の月高し。

＊　＊　＊　＊

『長白山の雲蹴つて破るべし。
鴨緑江の水飛んで渡るべし。』

井上文部の中等教育意見

井上文部大臣各中學校長に告げて曰く、

余は断然決意して中等教育制度を改正すべし。今度は高等中學を改めて專門學校にして、授業には外國語を用ゐぬ積である。外國語は高等普通學(即中學)だけに止めて專門學校には隨意科の外、外國語を用ゐぬことにし(但し現在の帝國大學は舊に仍るの必要あり)。なるべく授業時間を減することにせんと思ふ

而して彼は併せて熱心に躰育の要を説き、又生徒の無目的を非難したりき。

黒死病

黒死病大に香港に流行す。病は極めて猛烈なる傳染症にして、初發より五月二十二日正午迄に死亡三百十九人に上りたり。

名高き北里柴三郎青山胤通の兩醫學博士は、此の豫防法さへも明かならざる恐ろしき病の原因を知るべく去て香港に向へり。六月第五日此の壯途に上りぬ。



◎新發明化粧下廣告◎



定價

大瓶金拾五錢〇中瓶金拾二錢〇小瓶金八錢

それ牡丹は富貴の花と呼びて猛き獅子王も此花に戯れ優しき蝴蝶も此花に眠り尊き唐土の帝國も此花を愛し玉ふとかやされはこそ牡丹を花の王と申なれ弊店白牡丹白粉の儀舊來より江湖諸彦の一方ならぬ御愛顧にて益々盛大を極め難有存候偖今回發賣の牡丹水はさる名高き藥劑師と種々協議を凝して發明したる白粉下にて一度これを用ゆれは其名の牡丹花の如く顔の色艶美麗となるは申までもなく高價の藥劑をも加へあれば第一皮膚病一切にきひそはかす鉛毒を消しふきて物等効能あることに疑ひあるべからず當今諸々に賣出す他の化粧下に秀で優るは佳香馥郁として一度手先につくるも二三日は匂ひ失せぬ處誠に稀代の化粧下にして貴女方のかくべからぬ品なる事を知ろしめし幾久敷御愛顧あれかし

登錄 商標

東京市京橋區尾張町壹丁目
白牡丹本舖　松田謹製

◎貴婦人頭髪用美術裝飾品廣告◎

- ◎鼈甲製（儀式用 丸髷用）櫛笄簪各種
- ◎珊瑚珠根懸簪玉各種
- ◎帝國美術蒔繪櫛笄各種
- ◎金銀製寶石入（彫刻簪 指輪根懸）各種
- ◎（優美高尚）擢朱彫櫛笄簪玉各種
- ◎（流行）瑪瑙珠根懸簪玉各種
- ◎（夏期適當 芳香無比）白檀製（白壽翁筆 蒔繪櫛笄）各種
- ◎（新案流行 夏期適當）蝶貝製櫛笄（簪 根懸）各種
- ◎本象牙製（彫刻 蒔繪）櫛笄簪各種

右記載の外御櫛笄簪根懸等時々流行に魁け新意匠の物品續々出來廉價を旨として販賣仕候間相不變御用向被仰付度伏て奉願上候

東京市京橋區尾張町壹丁目
白牡丹本舖松田謹白

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治廿五年九月十四日遞信省認可

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍印行

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA